高度経済成長期を契機とした植生景観の変化について

A Study of the Vegetation Changes Triggered by the High Economic Growth Period

小椋純一

OGURA Jun'ichi

はじめに

❶岡山県北部の中国山地（津山市阿波付近）の場合

❷京都市北部郊外（左京区岩倉付近）の場合

❸伊勢湾口の離島（神島）の場合

❹総括

おわりに

［論文要旨］

高度経済成長期を契機とする植生景観変化とその背景について，岡山県北部の中国山地（津山市阿波），京都市北部郊外（左京区岩倉付近），伊勢湾口の離島（神島）の3つの地域を例に，写真や文献類，また古老への聞き取りなどをもとに考察した。

その結果，岡山県北部の中国山地では，高度経済成長期の頃までは，牛の放牧などのために広い草山が見られるところが何箇所もあったが，高度経済成長期を契機にして，草山は急速になくなっていった。一方，スギやヒノキを中心とした人工林は，高度経済成長期の頃を中心に急増した。また，人工林などに変わることなく残った薪炭林では，その利用がなくなり，近年では樹木の大樹化が進んでいるところが多い。

また，京都市北部郊外の里山では，かつてはアカマツ林が広く見られたが，高度経済成長期の頃を境に，林が放置化されて植生の遷移が進み，近年ではマツ枯れによりアカマツ林は大幅に減少してきている。その一方で，シイやカシなどの常緑広葉樹林の割合が増えてきている。また，高度経済成長期の頃までは，さかんに森林が利用されたことにより，さまざまな林齢や樹高の森林が見られたが，近年は森林の樹高などの変化があまりなくなっている。

また，伊勢湾口の神島でも，かつてはその山の植生はマツが主体であったが，高度経済成長期の途中から，京都市北部郊外の里山と同様に，マツ林は大幅に減少し，その一方で，近年ではヤブニッケイやカクレミノなどの常緑広葉樹主体の森林が増えてきている。一方，かつては山の南向き斜面を中心に広く見られた段々畑は放置されるところが増え，森林化しつつあるところが多い。

このように，高度経済成長期以降の植生景観変化は，地域によりさまざまであるが，いずれの地域でも高度経済成長期の頃の人々のくらしの激変や国の政策などが原因となり，人々の植生への関わり方も大きく変化し，それによって大きな植生景観の変化が生じた。

【キーワード】 植生景観変化，高度経済成長期，岡山県北部，京都市北部，神島

はじめに

日々のくらしの中ではさほど変化がないように見える植生景観も，数十年の単位で見ると，大きく変化してきていることが多い。明治維新以降，ここ百数十年間の日本の植生景観の変化はかなり大きなものがあるが，中でも高度経済成長期から現在まで，とくに急激で大きな変化が見られるところが多いように思われる。

本稿では，高度経済成長期の頃まで，日本の植生景観はどのような状態であり，それがその時期を契機としてどのように変化してきたのかについて，3つの具体的な地域を例に考えてみたい。その具体的な地域として取り上げるのは，筆者の郷里である岡山県北部の中国山地（津山市阿波付近），筆者が大学時代以降居住する京都市の北部郊外（京都市左京区岩倉付近），また三島由紀夫の小説『潮騒』の舞台にもなった伊勢湾口の離島（三重県鳥羽市神島）である。

それら各地域の植生景観の変化とその背景について，主に昭和20年代（1940年代後半～1950年代前半）以降の写真，文献類，古老への聞き取りをもとにまとめてみたい。

❶……岡山県北部の中国山地（津山市阿波付近）の場合

筆者が生まれ育った岡山県北部の中国山地山間の村は，平成の大合併で2005年に津山市に編入され，津山市阿波となったが，それまでは阿波村という小さな村であった。筆者は，進学や就職に伴い，しだいにその村で過ごすことが少なくなっていったが，今もふつう季節に一度はそれぞれ何日か実家に帰り，実家の農作業などの手伝いとともに，春は山菜採り，夏は子供と一緒に川での魚取り，秋は山芋掘りなどをして過ごしている。

その村の南部には，谷添いを中心に集落や田畑が主に南北に連なり，田畑もそれなりの面積あるが，そうした集落や田畑の周辺は概ね山地であり，今は主に何らかの森林で覆われている。しかし，

写真－1　大ケ山（1978年：既に草原への火入れはなくなっていたが，まだかつての草原の状態が残っている）

写真－2　黒岩高原（1978年：高度経済成長期よりも前から草原への火入れがなくなっていたところで，草原に樹木が侵入し森林化しつつあるところが多い）

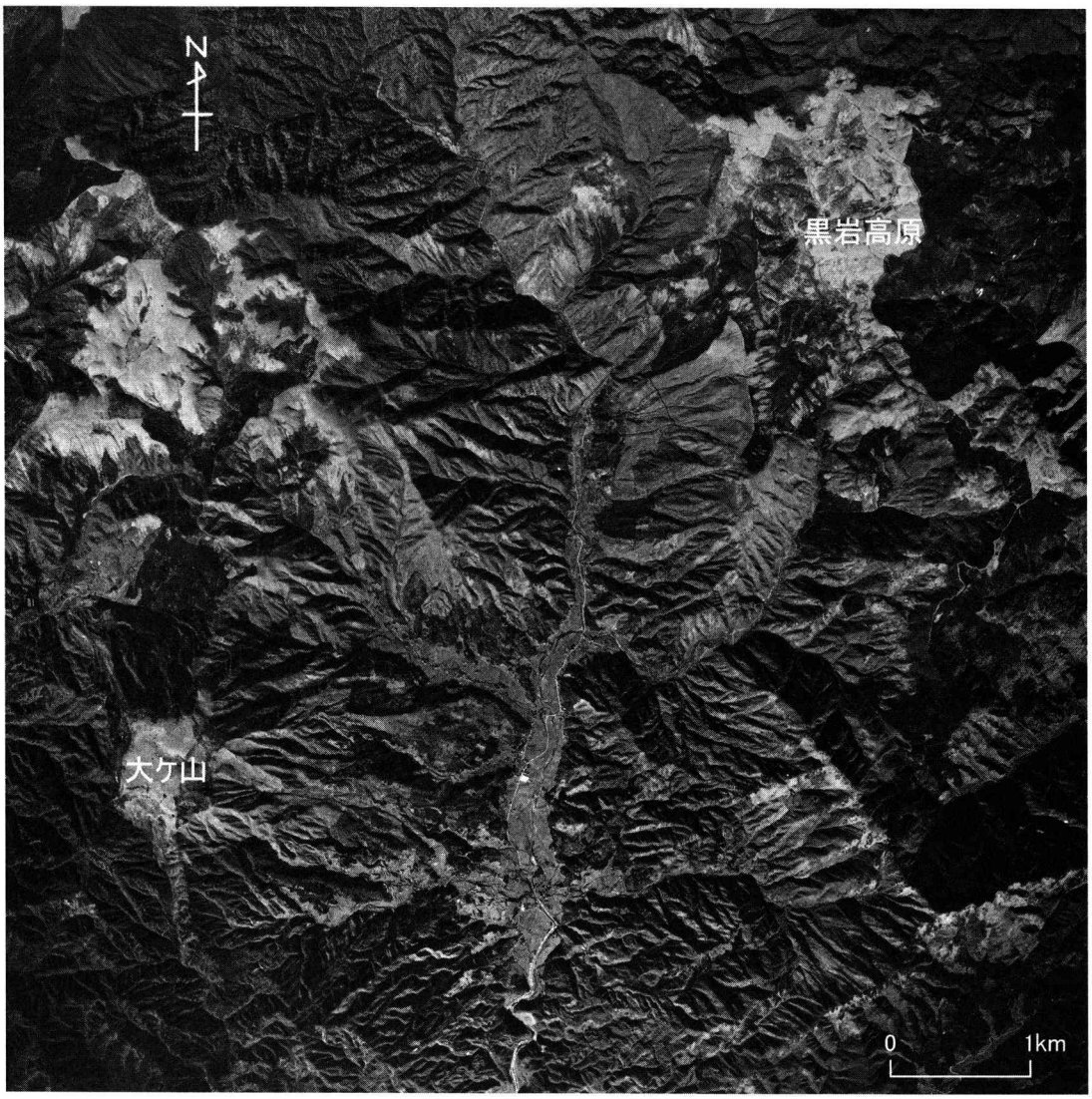
かつては森林とともに草原も結構あり，筆者が小学校の中学年の頃までは，そうした草原は毎年春に山焼きが行われ，そのようにして維持された草地は，放牧や茅刈りなどの場として使われていた（写真-1）。その後，そうしたことも行われなくなり，やがて草原は植林がなされるなどして急速に森林化していったところが多い（写真-2）。

ここでは，筆者が幼少期から今日まで見てきたその村について，高度経済成長期を契機に植生景観がどのように変化したのか，またその背景についてまとめてみたい。

（1）写真に見る高度経済成長期前後の植生景観

高度経済成長期の前後において旧阿波村付近の植生景観がどのように変化したのか，米軍と国土地理院が撮影した空中写真で確認したい。

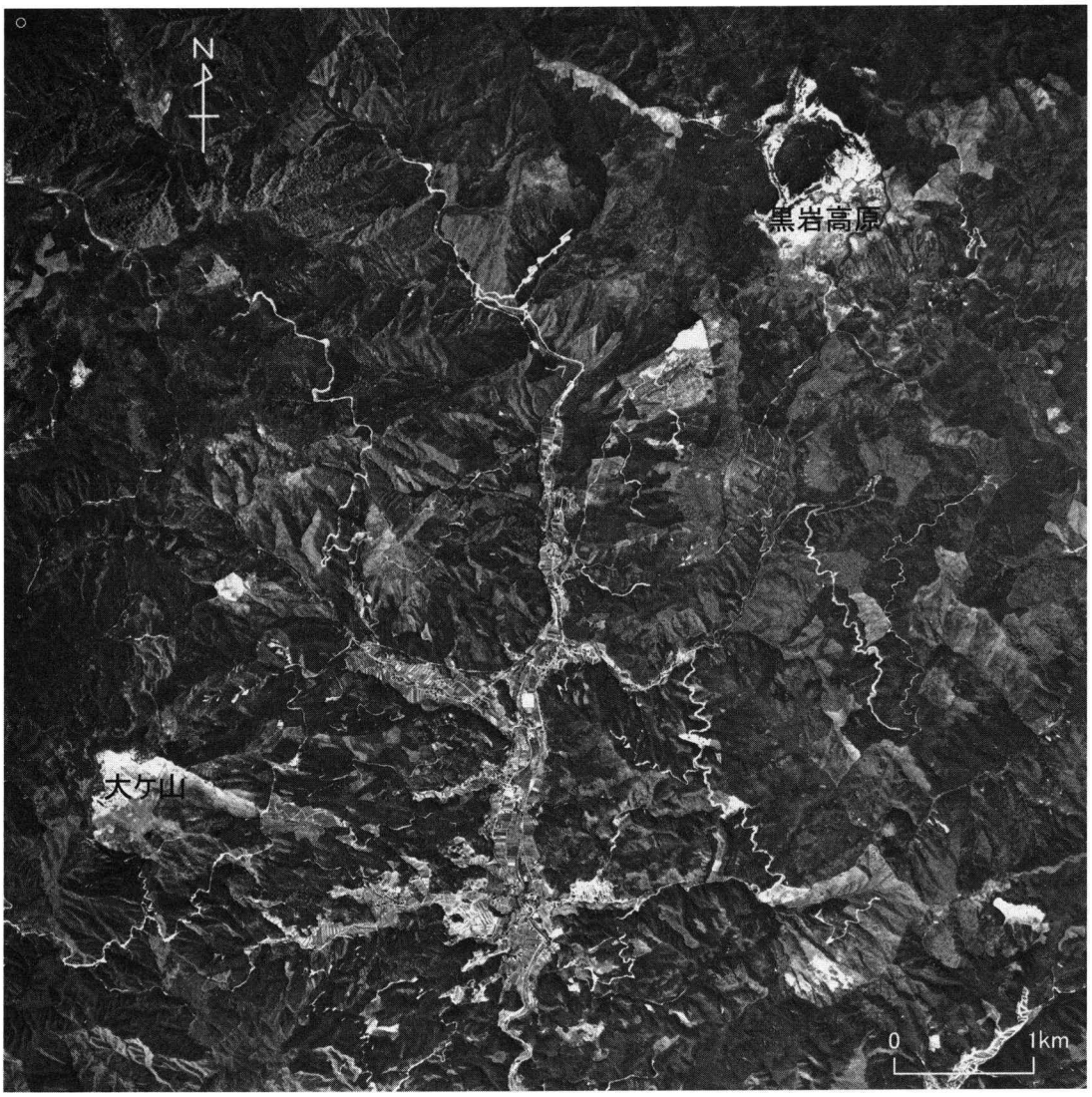
写真-3は，昭和23（1948）年11月22日に米軍が撮影した旧阿波村付近の空中写真である。一



写真－3　昭和23（1948）年11月22日撮影の空中写真（米軍撮影，旧阿波村付近）

方，写真-4は，昭和61（1986）年5月10日に国土地理院が撮影した旧阿波村付近の空中写真である。ともに7000 m近い高度からの撮影で，詳細は確認しにくいが，写真-3では山の襞がたいへん細かく明瞭に見えるところが多いのに対し，写真-4ではそうでないところが多いこと，あるいは，写真-3では山地の部分に比較的薄い色調のところが多いのに対し，写真-4では，濃いところの割合がかなりあることなどがわかる。山の襞が明瞭に見えることは，植生が低いことを示すものであり，また，濃い色調のところは，日陰でそのように写っている部分を除けば，大部分が常緑針葉樹であるスギやヒノキの人工林である。

なお，写真-3で濃い色調のところには，山の北側斜面で日陰となってそのように見えているところも多く，色調の濃淡が必ずしも植生を反映しているわけではない。また，写真-4では道路やグランドなどが白く見えるが，山地部でまとまって白く見えているところの大部分はススキなどの草原である。写真のコントラストの関係で白くなってはいるが，写真の撮影日から考えると，雪が



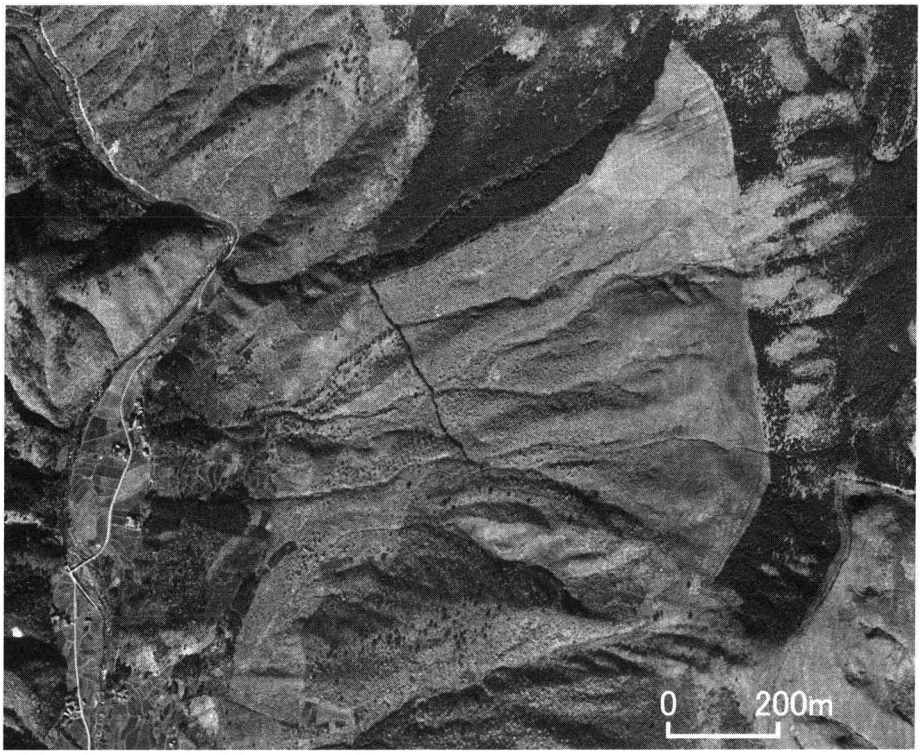
写真－4　昭和61（1986）**年5月10日撮影の空中写真**（国土地理院撮影，旧阿波村付近）

残っていてそのように写っているのではないと思われる。

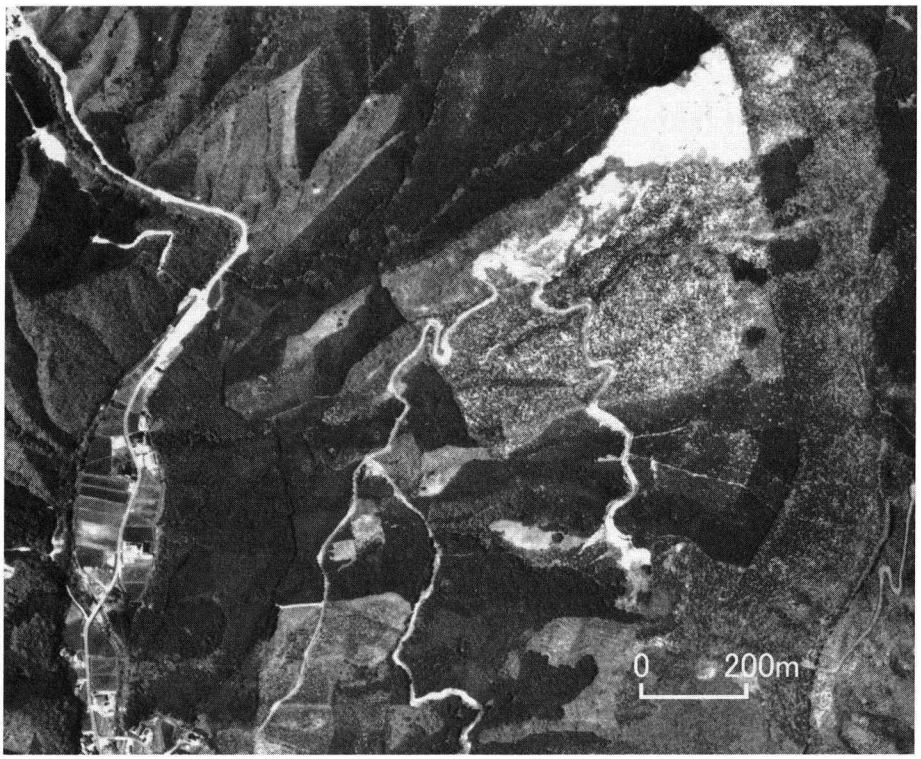
ちなみに，写真-5は，昭和23（1948）年1月21日に米軍により撮影された空中写真である。写真-3と同じ年に撮影されたもので，北側（上部）の一部は写真-3と対比できないが，雪のある時期に撮影されており，この写真から低い植生の部分を知ることができる。旧阿波村付近の積雪は低地では多くても数十cm，山の上部では多くても1～2m程度であるため，谷筋の農地や宅地の部分を除く山地部で，真白あるいはそれに近いところのほとんどは草原であると思われる。そのかつての草原の分布は筆者が子供の頃の記憶と矛盾するものではなく，写真-5の右上部（北東），左上部（北西），左やや下部（西）を中心に，高度経済成長期より前の頃，かなりの草地があったものと考えられる。それに比べ，写真-4からわかる高度経済成長期の後の草地の面積は，かなり少なくなっている。

なお，写真-3，写真-4は広範囲を撮影したもので細部が見にくいため，それらの一部を部分的に拡大してみたい。たとえば，写真-6は，写真-3の黒岩高原の南西に隣接した大杉地区の牧場（写真-6の中央よりもやや右のあたり）や同地区の集落や農地の一部（写真-6の左方中央から下方にやや曲がりながら長く伸びる）付近を拡大したものである（図-1のAの部分）。その1948年の写

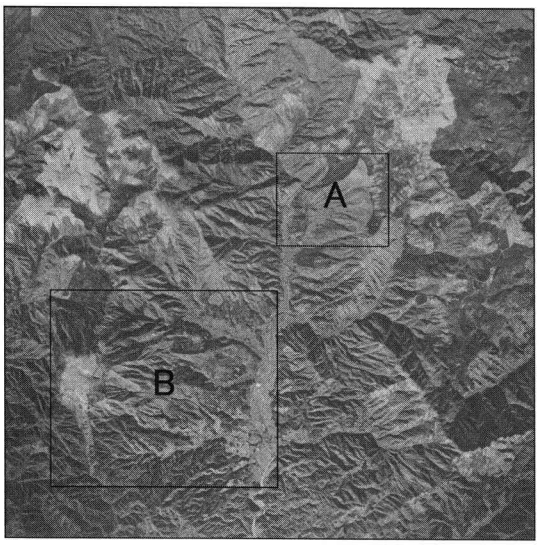
写真－5　昭和23（1948）年1月21日撮影の空中写真（米軍撮影，旧阿波村付近）



写真－6　大杉地区の牧場など(1948年11月22日)



写真－7　大杉地区の牧場など(1986年5月10日)



図－1　旧阿波村の拡大部分位置
（ベースの写真は写真－3）

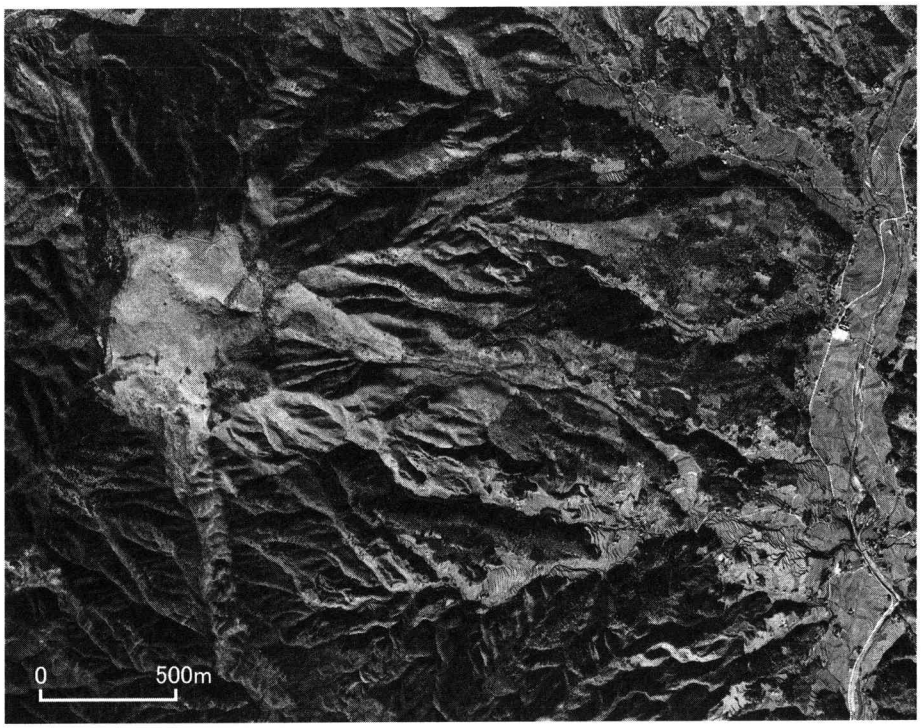
写真－8　大杉地区の旧茅刈り場付近
（2006年5月5日）

真のほぼ中央部を斜めに走るラインは樹木の列で，そこには放牧のための柵があったところである。放牧は，その右手（東方）の山の斜面で行われていた。写真で見ると，牧場の下部には灌木や低木が少なくなかったところも結構あったことがわかるが，高木と言えるほどの樹木はなく概して草原的な植生が広がっていた。その牧場の右手上方（北東）には鋭角に尖った形をした部分があるが，その付近は民家の屋根を葺く茅を採取したところで，写真では牧場と同じような植生に見えるが，牛が入らないようにされていたところで，よく見るとそこには灌木や低木は全く確認できない。この茅刈り場と牧場には，高度経済成長期の途中まで，毎年春に火入れがされていた。

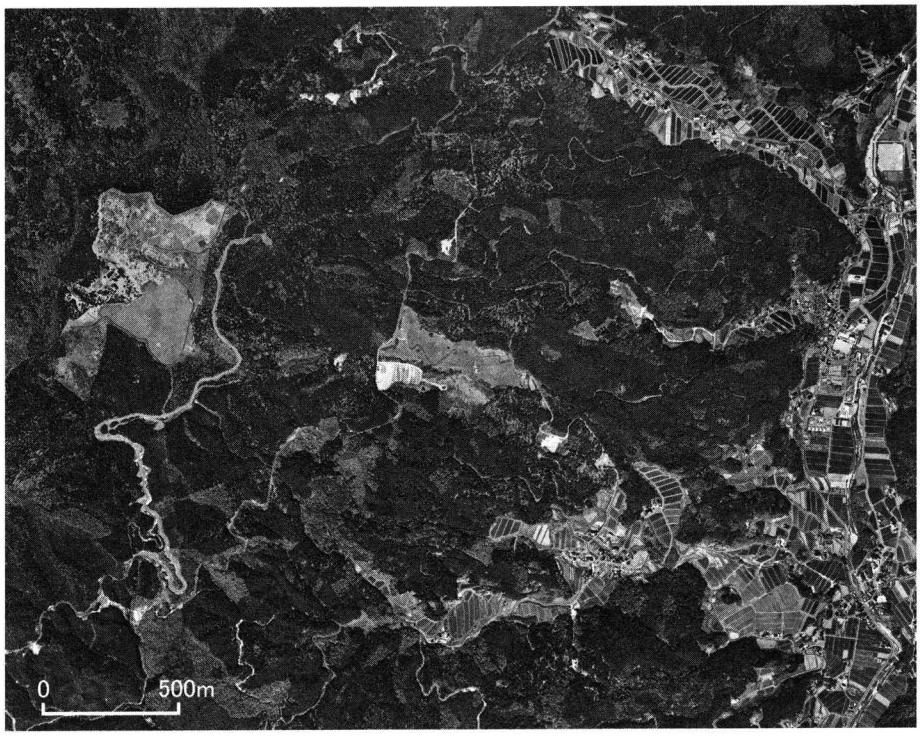
一方，写真中央の放牧柵の左手（西方）や下方（南）には，高木が確認できるところもあるが，その部分にも草地が少なからず見られる。地元の古老によると，そこは牛の餌や肥料用の採草地として利用され，薪の採取もなされていたという。また大杉地区の集落の上方（北側）にも，草地か低木の雑木林と見られる植生部分がかなり広く見られる。

牧場や茅刈り場の上方（北側）や右手（東方）には，スギやヒノキの人工林がまとまって見られるところがある。そのうち，右手の人工林の部分には，やや斜め左右にやや細長く伸びた草地的なところ（色の薄いところ）が多く見られるが，その部分はやや急斜面のため，春先に発生する雪崩によって植林がうまくいかなかったところである。集落の近くにも，スギやヒノキの人工林と思われる樹林地が一部に見られる。

写真-7は写真-4の一部で，写真-6と同じ区域の昭和61（1986）年5月の状況である。かつての牧場の部分は，南側は人工林化されているところがかなり見られ，そのほかの所も樹木が成長し，全般的に森林化が進んでいる。かつての茅刈り場の一部も人工林となっているところもあるが，まだ草地として残っているところがかなり見られる。写真では，濃い色調のところが広く見られるが，それらはスギやヒノキの人工林であり，樹冠の大きさからさまざまな林齢のものがあることがわかる。牧場や茅刈り場の右手（東方）にあった人工林の大部分は伐採されて間もないように見えるが，



写真－９　大ヶ山山頂から東方付近（1948年11月22日）



写真－10　大ヶ山山頂から東方付近（2005年5月17日）

そこも再造林がなされている。このように，高度経済成長期の後では，人工林の割合がたいへん大きくなっている。一方，雑木林（人工林に比べると色調が薄い）の樹木は，だいぶ大きくなっているところが多い。

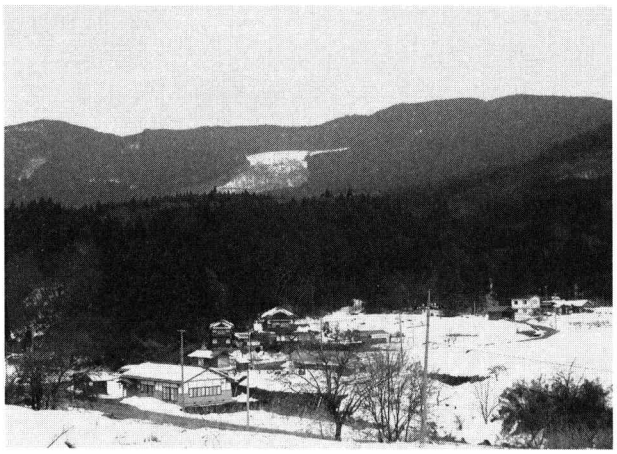
なお，かつての茅刈り場付近も，近年では森林化やササ原化の進行が顕著である。写真-8は，2006年5月5日にその西方の山から撮ったそのあたりの写真であるが，もとはきれいな草地であったところもササ原化や樹林化が目立つようになってきていることがよくわかる。

次に，写真-9は，1948年の大ヶ山からその東方部分を拡大したものである（図-1のB）。写真の左手中央に見える比較的平坦なところが広がる大ヶ山の山頂のあたりは，茅刈り場として使われたところで，たいへんきれいな草地が広がっている。その右手（東方）にも，きれいな草地がかなり広く見られる。その一部は，かつてスキー場として使われていたところで，山頂から下方に競技スキー用の良いコースができるので，岡山県の県大会などがよく行われていたところである。そのほかにも，集落の近くなど，草地が一部見られるところがある。

その写真の右手上方（北東）のあたりなどには，やや高木の雑木林と見られる植生の部分もあるが，雑木林の樹木は，さほど大きくないところが多いように見える。スギ，ヒノキの人工林は，大ヶ山の頂上の上方（北側）から右手上方（北東）にかけてまとまって見られる部分があるが，ほかに確認できるところは少ない。

一方，写真-10は，2005年5月17日に国土地理院が撮影した空中写真の一部で，区域は先の写真-9とほぼ同じところである。大ヶ山の頂上付近には，まだかつての草地の名残が残っている所も少なくないが，そのほかに見える草地は，その右手（東方）やや下方の現在もスキー場や放牧地として使われているところ（やや斜めに長く伸びる草地）くらいしかない。農地や集落の周辺には，一部に高木化した雑木林のあるところもあるが，その大部分はスギやヒノキの人工林となっている。なお，農地は耕地整理がなされ，かつて見られた等高線に添ったきれいな棚田は，全く消えてしまっている。

以上のように，高度経済成長期の前には，旧阿波村付近では草原が多く，また樹林地でも低い植生のところが多かったが，高度経済成長期の後では，そうした草原の面積は大幅に減少し，また森林の樹高は全般にかなり高くなってきている。また，森林は，かつては雑木林が多かったのに対し，高度経済成長期の後ではスギやヒノキの人工林の割合がかなり大きくなってきている。写真-11は，2004年1月1日に，大杉地区の一角から，旧牧場方面を撮影したものであるが，雪で白く見える旧牧場と茅刈り場の一部を除き，山の部分のほとんどがスギやヒノキの人工林となっており，この写真も近年の旧阿波村の植生景観の状況をよく示している。



写真－11　大杉地区集落から，かつての牧場，茅刈り場方面を望む（2004年1月1日）

(2) 植生景観の背景について

旧阿波村の植生景観とその変化の背景について，ここでは『阿波・梶並の民俗』(1971)[1]，『阿波村史』(1993)[2]，また『阿波村史』を中心になって編集，執筆した小椋繁述氏の回顧録[3]を中心に考えてみたい。なお，それらの文献類の記述引用に際して，明らかな誤字については，修正をして記した。

a) 広大な草山の存在とその消滅の背景

かつて草山が広く存在した背景としては，民家の屋根材料の茅[4]の確保，牛馬の飼料としての草の確保，放牧地の確保，肥料としての草の確保などがあったものと考えられる。それについて，『阿波・梶並の民俗』では次のように記載されている。

「村有林が各部落に貸与され，各部落は茅刈り山，草刈り山（採草地），マキバに分けている。茅刈り山にはよい茅を生やすため春3月末頃に「山焼き」（火入れ）をする。西谷（にしだに）では4月に火入れをしている。かつては山焼きには部落の全戸から出ていた（中土居（なかどい），大杉）。竹之下（たけのした）では瓦葺の人は茅はいらないが春の山焼きには出ている。瓦葺の人は1戸から1人，茅屋根の人は2人出ている。大高下では刈りたい人だけが火入れをしている。

茅刈りは雪が降る前の新10月末～11月初めが多いが，西谷では11月20日～25日の間に「茅の口あけ」というて刈り始め日を決めるのである。口あけをしたら2日でも3日でも自由に刈れる。尾所（おそ）では部落総出で刈りに出る。大体1日刈ればよいところは刈ってしまう。大杉では昭和15（1940）年頃までは「ヨリアイ刈り」といって1戸から2人出て刈りにいった。昔は茅山をAは1号，Bは2号，Cは3号というように現場を分けていた。いまは刈りたい人が刈り，人手のない家では人を頼んで刈ってもらい夜御馳走を出している。刈り取った茅は茅グロ（西谷）とか茅立て（大高下）とかいって茅山に立てておく。」(p.30)

また，田植えに関して，次のような記載もある。

「肥を入れてすきこむのであるが以前は雑草（ぞうくさ）を入れないと稲ができないといって山の青柴草をすきこんだ。田植までには腐ってしまう。」(p.12)

これらの記述からは，草山は村から各部落に貸与されたもので，各部落はそれを茅刈り山，採草地，放牧地に分けていたこと，茅刈り山にはよい茅を生やすため春3月末から4月にかけて火入れをしたこと，茅刈りは10月末～11月下旬にされたこと，また雑草が刈敷として利用されていたことなどがわかる。茅刈り山で刈り取られた茅は雪が消えた後，草山に火入れがなされる前に家まで運搬し，カドヤ（離れ）の天井裏などに貯蔵されたという[5]。

一方，『阿波村誌』では，かつての茅刈り山について，次のように記されている。

「昭和の初期まではほとんどの家は茅葺きであった。このため各地区には村有地に共同の茅

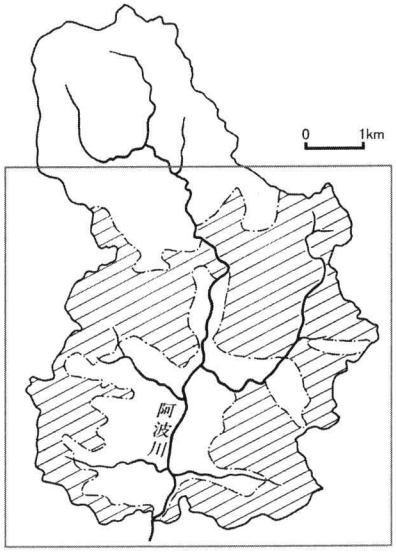
刈場が設けられており，茅の生育を良くし，雑草木の繁茂を押えるために毎年春先に地区の全戸が出役して火入れをし焼き払っていた。茅は細めの方が固くて耐久力があるし，薪炭林や植林地として不適地な高所や痩せ地が茅刈場に選ばれていた。大ヶ山（だいがせん）の頂上や尾所滝谷頭（おそたきだにがしら），大杉牧場上みの段などいずれも高所にあった。秋，すすきの穂が枯れる頃になると茅刈りが始まるが，大ヶ山（西谷（にしだに），中土居（なかどい），大畑（おおばたけ）三地区の刈場）のように日を決めて（口あけといった）一斉に思い思いの場所に入って刈る方法や，棒を立てて境界を作り，各戸に刈る場所を指定する方法（大杉地区など）があった。刈った茅は低地まで引きずり下ろし，そこから背負って帰るわけで一度には運べないので何日もかかって運んでいたし，一部はそのまま山に立てておいて翌年春先火入れが行われるまでに運んでいた。運んで帰った茅は屋根裏や納屋の隅，軒下などに保管する。こうして毎年刈り貯めておいて何年か一度に屋根を葺き替えるときに出して使ったり，近隣で貸し借りもした。」(p.81)

この記述から新たにわかることとしては，茅は細めの方が固くて耐久力があることもあり，茅刈場は薪炭林や植林地として不適な高所や痩せ地があえて選ばれていたこと，刈った茅は，秋のうちに家まで運ばれたものも少なくなかったことなどがある。

なお，上記引用部分では，『阿波・梶並の民俗』，『阿波村誌』ともに，“茅刈り山”によい茅を生やすため，火入れをしたことが記されているが，毎年火入れがなされたのは茅刈り山だけではなく，放牧地も同様であった。それについて，『阿波村誌』では，村内には昭和30年代まで5箇所に放牧場があり，明治35（1902）年に肥料の刈り採りに必要な箇所を除いて防火線が設けられ，放牧場の区域に限定して火入れが行われるようになったことが記されている（p.188）。その放牧地の火入れについて，『阿波村誌』には次のような記載がある。

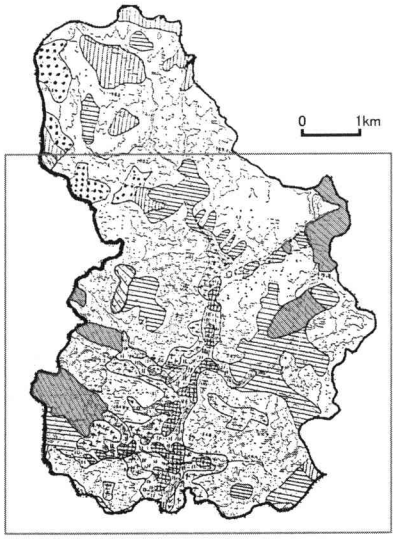
「四月に入ると放牧場は各地区ごとに火を放って枯草が焼き払われるが，あらかじめ周囲に設けてある防火線を掃除しておき，これに杉の青葉のたっぷりついた生枝の火たたきを持った要員を配置して場外延焼の警戒にあたり，火付け役が次々と火をつけて行く。防火線のあたりを先に燃やしておき，その後で下方から火をつけるので火が一斉に上方に燃え上って行くさまは壮観であった。あとには黒々とした牧場が広がるが，煙の中で延焼を警戒する者にとっては，熱気と煙で苦しんだものである。無事山焼きが終ってホッとするのは毎年のことであった。」(p.189-191)

防火線を設けての火入れは，薪炭林の育成と造林地の保護の必要が生じてきたためとされ[6]，それ以前は，古老の話などから，より大規模な火入れが行われていたものと考えられている[7]。『阿波村誌』には，明治31（1898）年測図の地形図をもとにして作成された当時の草山の広がりを示す図（図-2の上図）が掲載されているが，それによると深山（みやま）と呼ばれる村の奥地（北部）と人里のすぐ近くを除く村の大部分が雑草地，茅山などの荒地[8]となっており，当時はより広大な草地が存在したことがわかる。一方，『阿波村誌』に掲載された昭和50年代の同村植生図（図-2の下図[9]）から，高度経済成長期の終わりから10年前後ほど後でも，草山がかなり少なくなっていることがわかる。



明治31年(1897)測図の旧版地形図を基に作成した当時の草地の分布

○斜線部分は雑草地、萱山などの荒地
○白地部分は濶葉樹林、農用地など



	自然植生	自然度
	チシマザサ－ブナ群団	9
	代償植生	
	ブナ－ミズナラ群落	8
	クリ－ミズナラ群落	7
	コナラ群落	7
	アカマツ群落	7
	ササ－ススキ草原	5
	植林地・耕作地	
	スギ・ヒノキ植林地	6
	畑地・樹園地	2・3
	竹林	7
	水田	2
	その他	
	住宅地・造成地	1
	水流・池・湿地	

阿波村植生図(昭和50年代)
〈灰色の斜線部が草地〉

図－2　旧阿波村の明治31(1898)年と昭和50年代の植生図(『阿波村誌』掲載の図を一部改変：四角の枠は写真－3，写真－4のおおよその範囲を示す)

また，今では，先に写真でも見たように，そうした草山はいよいよ少なくなってきている。

高度経済成長期の直前の頃は，明治期に比べると草山の面積はだいぶ減っていたと考えられるが，それでも放牧地を中心に，まだかなりの草地が存在した。そして，そこには多くの牛が放牧されていた。それについて，『阿波村誌』には「放牧と飼育管理」に関する項目の中で，次のように記されている。

「農家は春6月に田植えが終ると放牧し，草木の成長した7月の半ばともなると連れ戻して厩に入れ，草を刈り込んで敷き，飼料とし，踏ませて堆肥としていた。夏厩は厩肥を生産するだけではなく，盛夏から牛を休養させる目的もあった。草刈りは朝薄暗いうちから起きて，素足に草履をはき，朝露を踏みながらブト（ブヨ）除けのカッコウ（乾草を細長くまるめて火を

つけたもの）をぶら下げて山に登る。それぞれ定められた採草地や牧場が草刈り場で，男はさし棒に前後に一束ずつ又は二束ずつ担ぐとか，牛を追い，その背の左右に三束ずつ計六束を負わせて帰っていた。女は主に負い子で三束ぐらい背負っていた。大量に草を刈り込んで牛に踏ませ，これを牛舎から引き出して大きな堆肥の山を作ることが自慢でもあった。9月ごろになると牧場の草も枯れるようになる11月半ばごろまで再び放牧していた。」（p.188-189）

このように，放牧地への牛の放牧は田植えが終る6月から7月の半ば，また9月頃から11月半ば頃までの年2回なされていた。7月の半ばから9月の暑い頃は，牛を厩に入れ牛を休養させながら，厩に毎日大量の草を刈り込んできて敷き，飼料とするとともに，それを踏ませて厩肥を生産したという。

なお，『阿波・梶並の民俗』では，春と秋の2回の放牧期間について，春は八十八夜頃から6月15日頃，または7月15日頃まで，秋は9月初旬または9月20日頃から降雪をみるまでの期間とある。[10] また，ずっと以前には，牛を牧場へ放しっぱなしではなくて，朝牧場連れて行き，夕方には連れて帰るという放牧の仕方であったという。[11]

肥料生産にとっても重要であった牛が農耕のためにも重要であったことは言うまでもない。そのため，農耕が機械化されていない時代，農家には牛1頭は必ず必要であり，数頭いる場合も少なくなかった。[12] また，そうした牛を周辺地域に農耕用に貸す一方，周辺地域の牛を飼育などのために預かることもあった。『阿波・梶並の民俗』には，それらのことについて，下記のような記載がある。

「山村であるから田植えが早かったので，田植えの少しおそい津山盆地や鳥取平野の農家へ5月に牛を貸して田植え準備の牛耕をさせた。これを「鞍下（くらした）牛」という。津山盆地がすめば鳥取平野へ出すというのもあって，借りる方では2-3軒の共同で借りたから，Aの家がすめばBの家へ，Bの家がすめばCの家へと牛はわたっていったので，1町歩以上耕やして1ヵ月ぐらいこき使われたから，帰るときには牛の働き料・使役料として米1俵ぐらい背負って帰るのであった（後には現金をもらうようになった）が，めっきりやせていた。秋には再び麦田の鞍下に出していた。一方夏季には津山盆地やその周辺（勝央町勝間田など），鳥取平野の牛飼育の農家では草不足により飼育しにくいから草の多い阿波村の農家に夏季だけコットイ（牡牛）を預けて飼育してもらう「預け牛」慣行があった。田上りといって田植えがすんだ頃から秋の彼岸頃まで預かり，このコットイに草を背負わせて運搬するのに使役した。そこで夏季には大抵の家に1頭はコットイの預り牛，1頭は自家もちのコットイ，1頭はオナメと3頭飼い，それに子牛がいれば4頭5頭と飼っていたのである。預って飼育するのであるけれども預り賃，飼育料はもらわないのであって，その間幾ら草負いに使ってもかまわないのであった。しかしときに縞反を1反ほどもらうことがあった。」（P.42-43）

『阿波村誌』に掲載されている明治32（1899）年以降の牛馬飼育状況表[13]によると，その表でわかる明治32（1899）年から昭和45（1970）年の村内の牛馬飼育数は，大部分が牛で，百数十から200余りの農家で200頭余りから300頭余りの牛馬が飼われていたことになっているが，村内で実

際に飼われていた牛の頭数は，それよりもだいぶ多かったということになる。なお，預かり牛は運搬用だけではなく，堆肥作りのためにも使われていた。[14]

高度経済成長期の昭和30年代になると動力耕転機が普及するようになり，それがしだいに改良されたものとなり，作業能率が格段に早いため急速に農家に普及してゆき，それとともに牛の役畜としての役割も終わることになった。また，牛が役畜として利用されなくなることによる子牛価額の低迷，また高度成長期に雇用が進み農家の兼業収入が増え，繁雑な牛の飼育が嫌われ牛を手離す農家が増えていった。そして，牛の減少により牧場は不要となり，長年続いた火入れや，牧柵修理も昭和30年代の終わりには姿を消すことになった。[15]

なお，この旧阿波村付近の草山の歴史について微粒炭分析[16]により検討した結果，古ければ約9000年，新しくても約6500年前から高度経済成長期の頃まで，植生に連続的に火が入ることにより草原が維持されていた可能性が高いと考えられる。[17][18] 家畜が飼われるようになる前のそうした草原には，たとえば狩猟のためとか，害獣駆除のためとかというように，昭和前期の頃などとは全く別の意味があったものと思われるが，いずれにしても高度経済成長期を契機に急速になくなっていったその草原の歴史は，きわめて古い可能性が高い。

b) 人工林急増の背景

上述のように，同村ではかつて野火などによって無立木地が多かったが，治水と森林資源造成のための植樹奨励，公有林野造林奨励が，国や県の補助事業によって進められることになる。旧阿波村での本格的な植林は明治33（1900）年からで，同年春，計20町歩（約20ha）の杉苗6万本が村有地に植栽されたことが村会会議録に残っている。明治30（1897）年に制定された森林法等による火入れに対する強い規制などもあり，その後も村有地を中心に植林が進められ，昭和10（1935）年度までに村有林の造林面積は303町歩（約300ha）に達した。[19] 一方，当時の民有林は，薪炭を採取するための雑木林が主で，杉や桧の植林の割合は少なく，植林地は雑木林がよく育たないところが中心であった。[20]

第二次世界大戦後しばらくは，私有林所有者にもしだいに植林に関心が高まるようになったが，当時，雑木林はまだ薪炭林としての役割が大きく，[21] 植林の拡大速度はさほど大きくはなかったようである。一方，第二次世界大戦中の木材乱伐，戦後復旧需要による木材不足とともに，水源林造成の緊急性も重なり国土緑化の必要性が大きくなり，全国的に造林事業が推進されるようになった。旧阿波村では，明治，大正年間の植林政策が村財政を潤していたこと，また個人所有の木材が高値で取り引きされる状況の中で植林熱が高まり，村有林の植林が昭和24（1949）年ごろから本格的に開始されるようになった。[22] そうした造林事業は県の補助金などをもとに進められ，現金収入の乏しかった当時の村民に雇用の場を創出し，一日に百数十名がその作業に出役することもあり，一年に60数町歩（約60数ha）の植林が実施されたこともあった。[23]

なお，高度経済成長期の初期頃，木材価格は高い水準にあった。それと関連することとして，町村合併に関する話がある。旧阿波村では，昭和29（1954）年4月1日をもって近隣の町村と合併する話が進められていたが，合併反対派による村有林の調査が行われ，その結果，推定約6億円の可処分造林地があり，その後30年間は充分な自主財源を確保することができるなど，後顧の憂い

はないということで合併は見送りになった。[24]

また，小椋繁述氏は，その頃の木材価格をめぐる状況について次のように記している。

「太平洋戦争では山林の樹木を大量に伐採したし，都市は空襲で破壊され，終戦後はその復旧に木材は高値をつぎつぎに更新していった。杉，桧の価額差も殆どなく，10万円で売りたいと思っている山でも20万円で買ってくれる。同じぐらいの山を今度は20万円で売りたいと思っていると30万円で買ってくれるといったあんばいであり，一本，二本でも買ってくれた。このような状況であったから，売れる植林木を持っている者は現金収入の少ない当時において，不時収入を得て豊かであった。・・・(中略)・・・耕運機，電気洗濯機，テレビ，脱穀機，籾摺機といった便利な機械や道具類がつぎつぎに登場してくるが，役場勤めの安月給ではなかなか買えないこれらの道具類を人にさきがけて買えたのも，先祖が植えていてくれた木のおかげであったと思っている。」

このような木材価格の状況とともに，上述の国の政策も加わり，高度経済成長期が始まる前から，人工林面積の拡大は進みつつあった。それに加え，先述の高度経済成長期における草山利用や薪炭需要の急激な減少などにより，スギ，ヒノキを中心とした人工林はいっそう増加してゆくことになった。それに関して，『阿波村誌』では，次のような記載がある。

「燃料用の製薪，製炭も盛んであったが，石油の輸入による燃料革命は，昭和37（1962）年を境に一気に進み，廃業する者が続出した。耕転機の普及もこのころから進み，農耕役牛の飼育も急減し，牧場も管理（火入れ，牧柵修理）の足並みの乱れにより遊休化し，そこへ植林が行われるようになったのもこのころからである。」(p.450)

「従来，牧場，茅山，採草地，薪炭林として，各部落に村有地の一定の区域を慣行的に貸与してきたが，これには一定の基準がなかった。植林地もしだいに拡大して行き，採草地，薪炭林の利用も生活近代化が進むにつれてしだいに遊休化しつつあったので，村有林の高度な活用—といっても当時としては時代の脚光を浴びたかの如き観のある「植林」ということであるが—を進めるため，これらの貸与地の公平化と，利用し易いように永久的に貸与することにして，これらを部落使用林と称して再配分を行うことになった。」(p.448)

なお，石油，ガス，電力が燃料として普及していなかった頃は，薪炭生産は村の産業の主要な地位を占め，石油が本格的に輸入され燃料などとして利用されるようになる昭和30年代半ば過ぎ頃までは，村民の多くが薪炭生産に携わり，その数は全村の戸数の半数以上に及んでいたこともあった。[25]

一方，昭和30年代後半からは木材の貿易自由化による外材の輸入増加によって木材価格が頭打ちになる中，伐採や搬出などの生産に関わる費用が増大し，村有林の売却による収益率が次第に低下するようになった。また，賃金や物価上昇により，村の財源確保のために森林の伐採面積は次第に増加し，その伐採面積の増加は再造林費用の増大にもつながって，更に伐採面積を増やすといっ

た結果になり，昭和40年代半ばには明治から大正にかけて植えられた木の大半が伐採されてしまった。[26]

その頃のことについて，小椋繁述氏は回顧録の中で次のように記している。

「かつて町村合併の問題で紛糾したとき，合併反対派の提案で売却可能な村有林の調査が実施された。その額は6億円とされ，当時村の自主財源として必要とされていた二千万円程度は30年間は大丈夫だとされ，その後も当時進めていた拡大造林の木材が伐採できるので阿波村は無税村になるどころか，村民にお金が配れると合併反対派は大層な鼻息であった。しかし，その後，木材価額は下落するし，生産費は上昇する。人件費や物価，公共料金などあらゆる経費が上昇するので，村有林の伐採面積も年々増え，やがて十数年を数えるうちに，伐採可能なところは殆ど無くなってしまっていた。」

杉の植林が大部分を占める村有林では，労働費など伐採搬出経費の増嵩により収益率が低下し，村有林の売却によって村の財源の多くを確保することは困難となっていったが，経済の高度成長に伴い，国からの地方交付税や財政投融資の拡大，補助金制度の充実により，村の財政をまかない公共事業を推進してゆくことができた。[27]

木材価格が低迷する昭和40年代からは，岡山県林業公社，日本森林開発公団などとの分収契約による造林に重点が移されるようになったが，造林の適地はほとんど植栽され，造林地は平成2（1990）年末で阿波村の全森林面積の約79パーセントに達した。[28]

c）その他

ここで参考にしたいくつかの資料には，上記以外の興味深い記述も見られた。たとえば，『阿波村誌』には，次のような記載がある。

「焼畑は手軽な畑作方法で古くから行われていた。杉，檜の造林が行われるようになってからは，造林地の地拵えに焼き払った跡地も利用していた。雑木を切り，笹など支障になるものはすべて刈り払って乾かし焼き払う。火入れは草木の成長の盛んな盛夏のころに行われることが多かったので，まわりは緑に包まれ，水分も多く，類焼の恐れは少なかった。焼き払ったあとには大根，白菜，小豆，菜種油の種を採取する菜の花などの種を播いた。腐植した土と，焼灰が肥料になり，雑草もほとんど生えないので手間がかからず，あとは収穫を待つだけであった。大根は甘味が強く，小豆はつる草が伸びない上，実の張りも良く，そのあとに植栽した杉，檜の成長も良くて一挙両得の野菜栽培であったわけで，柔らかい，土の深いところが主に利用されていた。」（p.147-148）

旧阿波村における，昔の焼畑の実態については明らかでないが，高度経済成長期の頃までは，造林地の地拵えを兼ねた上記のような焼畑が一部で行われていた。

また，『阿波村誌』には次のような記述もある。

「カマドでの煮物，イロリの焚火，風呂焚きにと，燃料の木寄せも大切な仕事であった。炭を焼く者は残り木を一定の長さに切り，束ねて山に積んでおき，春，軽くなってから背負い出す。

山を持たない者の中には川辺の柳も焚き物にしたので，今のように川辺に柳が生い茂るようなことはなかった。洪水のあとで，川岸に引っ掛かっている流木（みながれといった）も拾って焚き物にした。家では暗い土間の隅や，木小屋に積み込んでおくが，焚き物をたくさん貯えている家は裕福であるとされていた。貧富の差が激しかったその昔は，竹ノ下地区の話として伝わっているところによると，一年中の食糧米と，春までの薪物を貯えていた家は，お寺と，庄屋であった寺坂家，その分家の三軒ぐらいであったという。」（p.89-90）

旧阿波村は，大部分が山地で，そこにはかつては草原も多かったとはいえ，雑木林を中心とした森林も決して少なくはなかった。それにもかかわらず，『阿波村誌』に記されているように，人々の中には燃料となる薪炭を確保する山を持たず，川辺の柳や流木を焚き物にしていた人々もあったようである。空中写真などではわかりにくいが，肥料や秣用の植生利用も相俟って，人里の川辺には大きな草木は少なく，流木もあまりなく，すっきりとした状態が見られたものと思われる。また，森林はあっても，生活の厳しさのためか，薪炭を十分確保することができない家も少なくなかったようである。

❷……京都市北部郊外（左京区岩倉付近）の場合

筆者が大学時代以降，京都市に居住してから30数年にもなる。京都市の中でも，そのほとんどを北部郊外に居住し，そのうちの30年以上左京区岩倉（以下，岩倉と略す場合が多い）に住んでいる。また，現在勤務している大学は同じ岩倉にあり，その職場に移ってから，あと数年で30年になる。人生の中で最も多い時間をその地で過ごしてきたことになる。

現在，岩倉となっている地域は，昭和24（1949）年3月までは京都府愛宕（おたぎ）郡岩倉村であったが，同年4月に京都市左京区に編入されたところである。[29] 京都市の市街地に近く，今は宅地化が進んでいるが，元は京都郊外ののどかな農村地域であった。そこは小さな盆地状の地域で，地域の南東を除くほとんどを標高百数十mから500mあまりの山で囲まれている。

その岩倉の山地部の植生景観の変化は，上記の岡山県北部の場合とは全く異なるものではあるが，筆者が知る期間の中でもかなり大きく変化してきている。また，筆者が知らない高度成長期の頃，またそれよりも前の時代と比べると，よりいっそう大きな変化があるようである。ここでは，京都市左京区岩倉付近におけるそうした植生景観の変化やその背景についてまとめておきたい。

（1）写真に見る高度経済成長期とその前後の植生景観

ここでも，まず高度経済成長期の前と後の空中写真を見てみたい。写真-12は，国土地理院の国土変遷アーカイブでも公開されているもので，昭和23（1948）年3月30日に米軍が現在の岩倉付近を高度約6700mから撮影した空中写真の一部である。

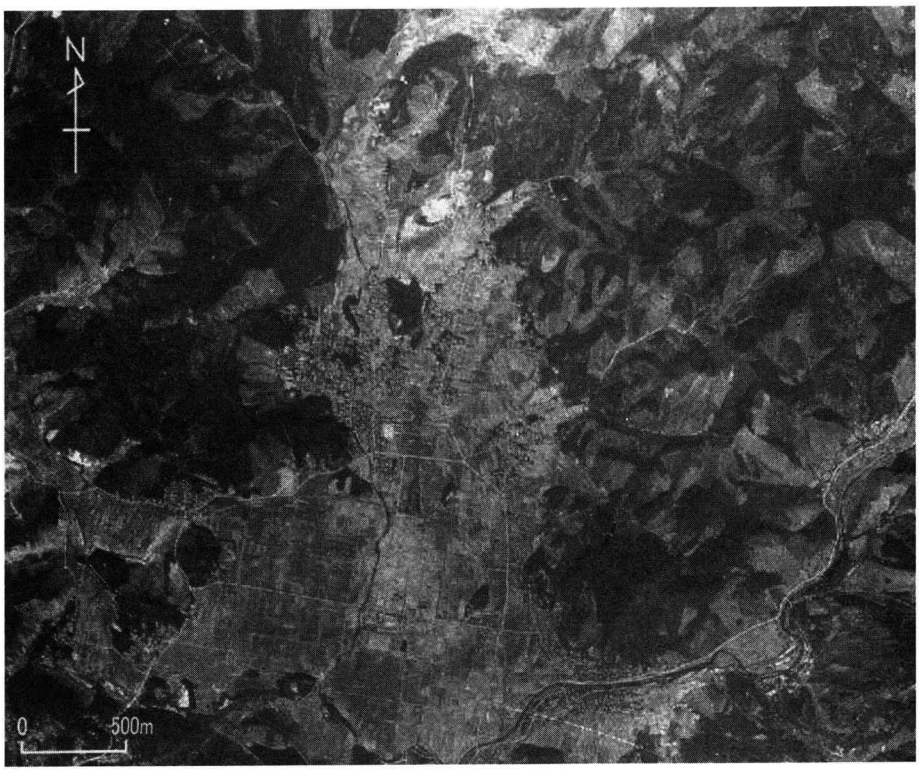
写真の範囲は，岩倉地域の北部と最南部の一部が切れている一方，右手（東方）には八瀬（やせ）などの一部，また左手（西方）には市原などの一部が含まれている。写真中央付近を中心に広がる農地や集落の周辺の山地部には，さまざまな濃淡の植生がパッチ状に見えるところが多い。比較的濃く，

樹冠が明瞭に見えるところは，大きな樹木がまとまって存在しているところで，写真中央の左手（西方）には，ややまとまって見えるところがある。また，同様な植生は，写真の左上（北西）隅に近いところや左下（南西）隅のやや上部あたり，あるいは写真中央よりも少し右下（南東）のあたりにも確認できるところがある。

写真上の植生の濃淡は，撮影時刻の関係か，写真の左方（西方）の方が，右方（東方）よりも全般に濃くなってはいるが，日陰の部分を除き，植生の高さや種類との相関が大きいと考えられる。すなわち，その色調が薄いほど，植生の高さが低いところが多く，とくに色調が薄いところは，草原的な植生で，草地か相当小さな樹木が生えているところ，あるいはその中間的な植生と思われる。

それについては，岩倉付近に関する明治期以降の文献などから，岩倉付近にはかつて草地は少なかったと考えられる[30]ことから，そのように薄い色調のところの大部分は森林が伐採されて間もないところで，その後に樹木が新たに侵入したり，あるいは植林がなされたりしているところと思われる。そのようなところは，岩倉付近周辺の山地に広く見られるが，とくに写真の右手（東方）の山地に多く見られる。

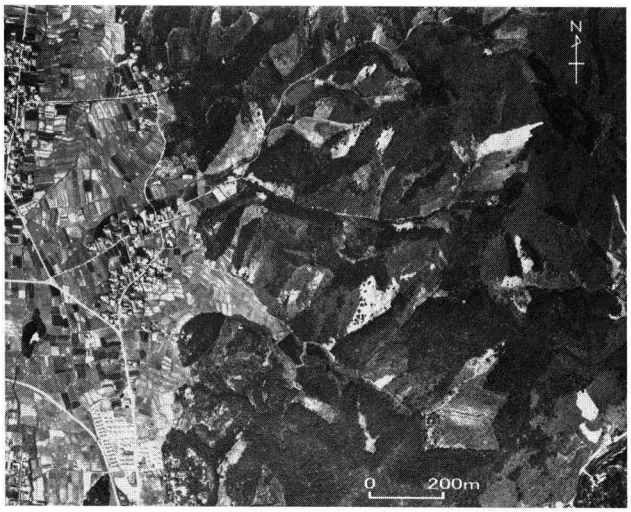
それに対して，色調が濃いほど樹高が高いことを示している場合が多く，とくに濃いところは，常緑の大きな樹木がまとまって存在していることを示している場合が多いと考えられる。その常緑の樹木の樹種は，岩倉付近に関する明治期以降の文献（後述）などから，主にアカマツと思われる。なお，樹木の大小は，樹冠の大きさからもわかり，比較的色調の薄い部分でも，写真右下方などの一部に高木の森林があるところがあることがわかる。そのようなところは，神社の裏山などに見ら



写真－12　昭和23(1948)年3月30日撮影の空中写真
（米軍撮影，現京都市左京区岩倉付近）

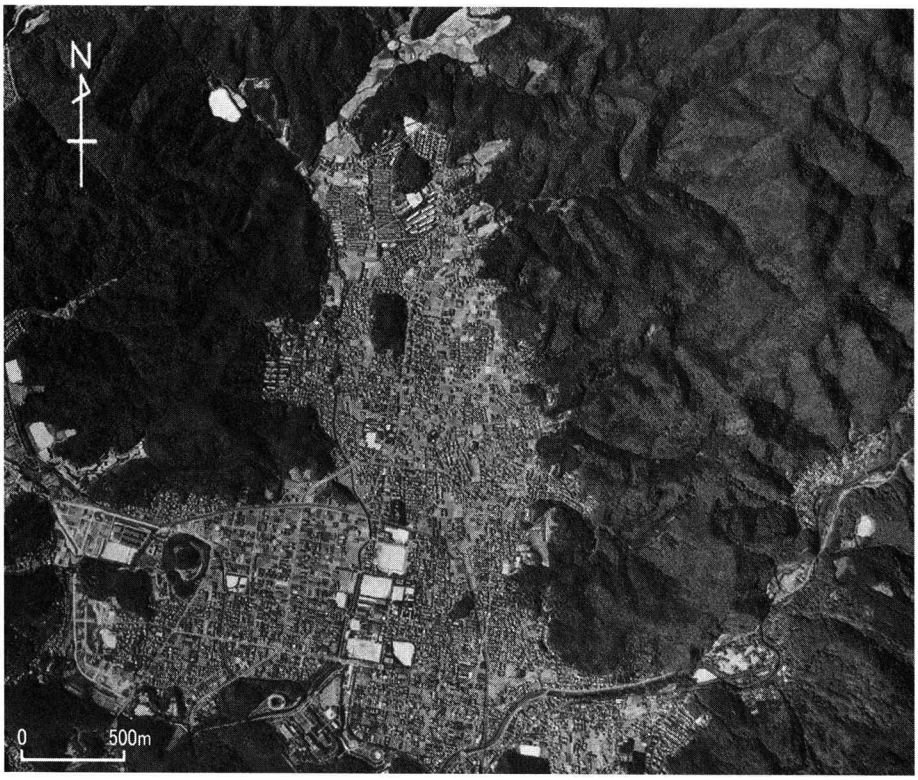
れることから，広葉樹林である場合が多いように思われる。

一方，写真-13も国土地理院の国土変遷アーカイブで公開されているもので，昭和38（1963）年5月7日に国土地理院が高度約4000 mから撮影した空中写真の一部であり，写真-12の中央よりも少し右下（南東）の部分をやや詳しく見たものである。この写真でも，山地の部分には，ほとんど真っ白で樹冠が全く確認できないところから，かなり濃く大きな樹冠がはっきりと見えるところまで，さまざまな植生がパッチ状になっていることが確認できる。この写真から，高度経済成長期の中頃，第二次世界大戦が終わって間もない頃に近い植生景観が，岩倉付近にはまだ残っていたことがわかる。

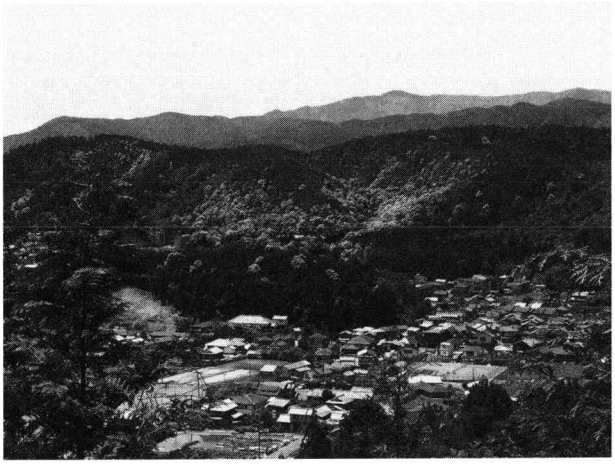


写真－13　昭和38（1963）年5月7日撮影の空中写真
（国土地理院撮影，京都市左京区岩倉南東部）

次の写真-14は，平成15（2003）年5月5日に国土地理院が高度約4700 mから撮影した空中写真である。写真の範囲は，上記の1948年の写真とほぼ同じところである。この2003年の写真でも，岩倉の東方（右手）の山地



写真－14　平成14（2003）年5月5日撮影の空中写真
（国土地理院撮影，京都市左京区岩倉付近）



写真－15　拡大するシイ林
（岩倉東部，2005年5月20日撮影）

を中心に，濃淡が少し見られるところもあるが，それは上記の1948年の写真に比べると，その濃淡の差は小さく，さほど目立つものではない。先の1948年の写真では，山地の濃淡の差は，植生の高さや樹木の大きさによるところが多いと考えられたが，この2003年の写真では，比較的薄い色調の部分でも大小の樹冠が見られるところが多い。山地の濃淡は，植生の大きさやタイプを反映している部分もあるが，比較的濃い色調の部分が北から東向きの山の斜面に多いことから，山の斜面の向きによるところが多いように見える。また，写真の左手（西方）の山地の方が，右手（東方）の山地に比べ，全般的に色調がやや濃くなっており，とくに北から東向きの斜面に黒っぽいところが多いのは，写真の撮影時刻によるものと思われる。

山地の植生の部分では，樹冠が認識できるところが多く，全般的に高木化した森林が多いことがわかる。森林の主な構成樹種はこの写真からは識別できないが，近年の岩倉付近の植生の実態から考えると，常緑樹中心の森林ではアカマツやヒノキやスギ，落葉広葉樹中心の森林ではコナラやアベマキなどが考えられる。

写真-15は，平成17（2005）年5月20日に，岩倉北東の山上から西方を撮影したものである。遠方に見える最も高い山は，京都市の北西部にある愛宕山である。比較的近景の山の樹冠の大きさから，岩倉近辺の山地は概して高木の樹木で覆われていることがわかる。なお，写真中央よりも少し上付近を中心にとくに白っぽく見える森林の部分はシイ林である。この写真は，ちょうどシイの開花時期に撮影したもので，シイ林やシイの木の分布がよくわかる。かつて作成された植生図[31]などから，このシイ林は，高度経済成長期の直後の頃でも，あまり分布が広くなかったと考えられるが，近年，その分布域を急速に広げている。

そのまとまったシイ林の下方などに見えるやや濃い植生の部分はヒノキやスギの植林地である。また，まとまったシイ林の上方の山の上部には，アカマツ林も見える。写真の最も右手上部の山のあたりは，かつては京都大学の研究者たちによりマツタケの研究がなされたところであり，アカマツ林が広く見られたところであるが，近年ではマツ枯れが進み，アカマツはかなり少なくなってきている。

(2) 文献や聞き取りからわかるかつての植生景観とその背景について

以上で述べてきたように，岩倉周辺の植生景観も，高度経済成長期の後，大きく変化しながら現在に至っており，その変化の契機は高度経済成長期の頃に溯るものと思われる。そうした植生景観のかつての状況やその変化の背景にあった人々のくらしなどについて，文献類や古老の証言をもとにまとめてみたい。

a) 文献類から

京都周辺では，かつてマツ林が多かったことは，筆者の世代でも実際の状況を見て知っているところであるが，そうしたマツが多い時代は，少なくとも平安時代の頃まで溯るものと考えられる。[32] 同じマツが多い林と言っても，その状態は時代によりかなり異なっていたものと思われるが，ともかくマツが主体の植生が長く続いていた背景には，人間により繰り返される強度あるいは過度の植生の利用があった可能性が高い。[33] 森林は，古くから燃料や建材の重要な供給源でもあったし，落ち葉や樹木の若枝や青草は田畑の肥料などとしても利用されてきた。岩倉は，長い歴史を持つ大都市京都の近郊に位置するため，その都市へ供給する燃料などもあり，その周辺山地には古くからさまざまな人為的影響があったものと思われる。あるいは，戦乱などにより，急激な影響を受けたことがあったかもしれない。

そのことについて，岩倉の南西に隣接する上賀茂神社の記録や明治38（1905）年にまとめられた大阪営林局の旧上賀茂神社領に関する資料などからも，かつて少なくともその付近では，地上の落ち葉までも利用し尽くすような森林の酷使が広く行われていたものと考えられる。たとえば，明治38（1905）年における京都周辺の国有林の状況などについても記した『京都事業区施業按説明書』（大阪営林局[34] 1905）には，次のような記述がある。

「本山神山両国有林ハ加茂神社ノ北部ニ位スル丘陵トモ謂フベキ二小山林ニシテ・・・（中略）・・・地質ハ共ニ秩父古生層ヨリ成リ角岩硬砂岩硅質粘板岩等ヲ以テ基岩ヲ構成ス土壌ハ之等ノ分解ニヨリテ生ゼルモノニシテ所謂砂質壌土ナルモ既ニ屢々下草ヲ採取シ又ハ林木ヲ伐採セルコト等アルニヨリテ腐植質ハ勿論其他ノ地被ヲ流出シ甚シキハ土壌ノ崩壊セルトコロアリ傾斜緩ナルニヨリ小局部ヲ除クノ外ハ一般ニ土壌淺カラザル如キモ地力甚シク減退シ其回復頗ル長時日ヲ要スベシ」

「神山本山安祥寺山ノ各国有林団地ハ従来頗ル濫伐等ノ難ニ遭遇セシガ如ク其地力何レモ瘠退シ大部ハ赤松ヲ存スルノミニシテ其溪谷其他ノ凹地ニ於テハ較々良好ナル生長ヲナスト雖トモ峯筋ニ於テハ土地甚ダシク乾燥瘠悪トナリ林木ノ生長非常ニ遲緩ニシテ到底建築用トシテ良用材ヲ得ルコト能ザルノミナラズ處々ニ土壌ノ崩壊シテ山骨ヲ露出セルトコロアリ」

岩倉に隣接したこれら本山，神山などの国有林では，同じ『京都事業区施業按説明書』から，明治38（1905）年当時は「地元細民ノ小柴又ハ枝條等ヲ窃取スルニ過ギズ其損害著シク大ナラザル」といった状況であったにもかかわらず，上記記述のように，それ以前の下草採取や樹木の伐採などによる過度の植生利用によって，「腐植質ハ勿論其他ノ地被ヲ流出シ甚シキハ土壌ノ崩壊セルトコロアリ」とか「處々ニ土壌ノ崩壊シテ山骨ヲ露出セルトコロアリ」といった山地の状況がその頃も見られたことがわかる。

また，明治10年代に作成された『京都府地誌』[35] から，岩倉付近の山の植生の概要を知ることができるが，それによると，その当時の岩倉の具体的な山の植生として，「山中喬木ナシ唯柴茅ヲ生ス」（御所谷山），「全山喬木ナシ」（大谷山），「樹木稀少」（大谷山，小谷山），「矮松生ス」（長代山，明

神山など）と記されたところがほとんどであり，樹木らしい木々がない山が多かったことがわかる。

このように，明治期の頃，岩倉南西部付近に限らず，岩倉周辺の山地では，森林の樹高が低いところが多く，一部には草木のないハゲ山も見られたものと考えられるが，その後撮影された写真[36]などから，森林の樹高が高いところが増えるなど，植生景観はしだいに変わっていったものと思われる。しかし，森林を構成する主な樹種がアカマツであることは長く変わらなかった。そのことは，第二次大戦中にまとめられた『岩倉の実態』（京都府師範学校代用附属国民学校1942）の中で，その頃の岩倉付近における山地の植生について，「・・・全山殆んど松樹（約九〇％）をもつて覆はれ所々杉檜の植林が行はれ一部分楢や櫟木（くぬぎ）の雑木雑生してゐる。」と記されていることからもわかる。

また，同資料の別の記載から，当時の岩倉周辺の山には，アカマツの他にスギやヒノキの植林地やコナラやクヌギの雑木林が所々にあったこと，また高木の樹種としては，アカマツのほかには，コナラ，クヌギ，ザイフリボク，ウワミズザクラ，シイ，ケヤキなどが，低木の樹種としては，コバノミツバツツジ，モチツツジ，ヤマツツジ，シャシャンポ，ネジキ，ナツハゼ，イワナシ等のツツジ科の植物が多く，他にガマズミ属，ウツギ属の樹木もあったことがわかる。

その後，上記の写真からの考察でも述べたように，高度経済成長期を経て，岩倉周辺山地の植生景観は大きく変わることになるが，その背景には，人々のくらしの大きな変化があった[37]。とくに，かつては燃料の採取などで山と深いかかわりがあったものが，高度経済成長期の頃より，急激になくなってしまった。そのことにより，岩倉付近の植生は，その地域の潜在的な自然植生である照葉樹林へと向かう流れが進行しつつある。近年，アカマツ林が減少する一方でシイ林がしだいに増えている[38]状況は，そのことを象徴している。また，最近ナラ枯れが目立ってきたのも，人が手を加える山がほとんどなくなってきたためと考えられる[39]。

なお，昭和21(1946)年から，岩倉の尼吹山でマツタケの研究をしていた浜田稔氏は，昭和45(1970)年に岩倉の山と人とのかかわりなどについて次のように記している。

> 「柴取りは村人の自由であったが戦後の数年などは山があまりにも荒れるので持主は他人が山に入るのをきらう程であった。しかし現今では燃料形態の変化により，山は雑木が茂り腐植もたまり放題である。そして，村人はたとえ柴が欲しくても山で柴をするのは恥かしいという。今後は山の原生林化が急激に進み，松茸は益々出なくなるであろう[40]。」

これは，高度経済成長期の終わり頃の話であるが，その頃，既に燃料採取などのために山が使われなくなって何年も経っていたようである。その後のアカマツやマツタケの減少，また森林の照葉樹林化を予測したこの一文には，昔ながらの山との関わりを恥かしいと感じるようになっていた高度経済成長期の終わり頃の村人の心境も記されており興味深い。

b）古老への聞き取りから

〈i〉今井武雄さんの話

今井武雄さんは大正14（1925）年1月に岩倉の長谷地区の農家に生まれ，戦後は長く京都大学の技官として勤務する傍ら，家の農作業なども続けてきた方である。定年退職後は，地元岩倉の自

治連合会会長などもされ，地域の顔的存在であった。既に亡くなられて何年にもなるが，以下は平成11（1999）年12月，今井さんが74歳のときに京都精華大学の筆者のゼミでお話いただいた内容のうち，岩倉のかつての植生景観やその背景にあった人々のくらしに関わる部分である。

・戦後間もない頃の燃料事情

「戦後間もない頃，焚き物（燃料）が不足していた。今のようにガスも普及しておらず，油もなかった。そのため，日本中で薪炭が主な燃料として使われ，京都の島津製作所のような大きな工場でさえ薪を使った。また，うちの親戚が名古屋にあるが，そちらでは田んぼの下の耕土の下に泥炭があり，そのようなものを掘って，それが飛ぶように売れた。泥炭は，石炭のかなり程度の悪いようなものだが，それぐらい薪が不足していた。

また，スギやヒノキは，もともとは用材用の木で，柱や板を取るためにある程度の大きさになるまで利用しなかったが，今考えるともったいないことではあるが，それらもみな割木にして燃料とした。」

・燃料に適した樹種

「落葉樹のクヌギは薪の中では一番上等だった。それはマツよりもヒノキよりも燃料としては格段に上で，煙の出方が少なかった。あるいは，焚いた後に残った“おき”が炭代わりにも使えた。一度燃えた後の残りが，上手に消したら炭代わりに使えたので，非常に良かった。」

・山での燃料採取について

「正月になれば，山のある家はもちろん，山を所有しない家でも，一月から三月は必ず薪つくりに山に入った。岩倉では山を所有しない家が七割ほどあり，そうした家の人たちは正月になると山持ちの家へ，どこどこの山で薪を取らせてほしいと交渉に行った。薪を取らせてもらった人は，さほど多くではなかったが，肉体作業奉仕や物品などで何らかのお礼をした。」

・薪の運搬について

「今のようにトラックはなく，人間が大八車を引いた。うちの横の街道も，多くの人が大八車を引いて，どっどどっどと山へ行った。そうして自分たちの焚き物を作った。また，私たちのように，薪を都会で買ってもらい，それを収入にする者もあった。150束くらいの薪を大八車に積んで牛に引かせ，それを町中の寺町三条まで運んだ。わずか50年あまり前だったが，当時はそのようなことができた。市電や自動車が来たら怖がって暴れるような牛だったが，河原町通りをとっととっと行って，寺町で荷物を降ろして帰ってきた。」

・薪の価値について

「薪が不足していた戦後間もない頃，月給をもらってくる人の月給が仮に2200円とすると，割り木の一束が50円くらいだったので，その月給は割り木40束ほどのものだった。割り木の束はいくらゆっくり作ったとしても，一日に10束くらいは楽にできる。そのため，私が4日ほど山へ行っ

て割り木を作ったら，月給取りが一月かけて稼ぐ額を稼ぐことができた。そのような状況だったので，勤めを辞めて山に入った人も少なくなかった。ともかく，薪が燃料としてものすごく値打ちあった。」

・山の景観の変化などについて

「毎日大きな牛車に山積みに割り木を積んで，どっどどっどと出ていった。工場やあらゆるところで薪が使われた。そのため，山は見る間に裸になっていった。山の木はかなり切られてしまった。その後植えたのが今育っているが，その値が安くて売れない。世の中というのはおもしろいものだ。」

〈ii〉松尾三郎さんの話

岩倉の南西部に近いところに深泥池(みどろがいけ)(41)という古い池がある。最終氷期にさかのぼる歴史をもつ池で，近畿地方では珍しく日本の亜寒帯地域でも見かけるミツガシワなどが群生し，天然記念物にも指定されている。その深泥池の付近は，行政上は京都市北区になるが，岩倉と隣接したところで，その境のあたりには標高百数十m程度の森林で覆われた低い丘陵がある。

大正4（1915）年2月生まれの松尾三郎さんは，深泥池の近くにお住まいで，幼少の頃から深泥池付近のことを見てきた方である。以下は，平成16（2004）年1月に，深泥池の保全を考えるための集まりにおいて，松尾さんからお聞きした話のうち，かつての深泥池付近の植生，またそれと人との関わりについての主な内容である。

・山での燃料採取について

「深泥池付近の人々にとって，北西側の国有林（官林）を除けば，山の所有関係は明確ではなかった。そのため，国有林以外の山の柴や下枝は自由に採取していた。松ヶ崎山やケシ山などは，山主が誰かわからず，皆自分ところの家の柴を刈るような顔をして，柴刈りに出かけていた。ただし，割り木などを十分買うことができた一部の裕福な家では，そのような柴刈りをする必要はなかった。

燃料の薪炭のうち，柴（鎌で刈れるような小さな雑木）はすべて近くの山から採っていた。晩秋から冬にかけての雪の降る頃には，深泥池周辺の山に村の多くの人達が行った。誰も皆鎌で柴を刈り，それを軒下などに積んで乾燥させた後に燃やした。柴刈りの道具は鎌だけで，鋸は使わず太い木は切らなかった。ただ，太いマツの木の枝は，鎌を使って採取していた。また，山の太い木の枝葉については，山師が木を切って割り木にして売った後に残ったものをもらうことができた。

一方，国有林では柴などを自由に採取することはできなかったが，毎年決められた区域の下柴をもらうことができた。それは村中の共同作業で行われ，刈った柴は頭割りで持って帰った。柴は，一部に鋸で切るようなものもあったが，ほとんどは鎌で刈れる程度のもので，ササなども刈った。

採取した柴などは自家用分だけで，採取時期は1月半ば頃から3月半ば頃にかけてであった。その作業のために，市原のあたりまで行くこともあったという。それは，昭和30年頃まで続いた。

なお，燃料を近くの山ですべて確保できたわけではなかった。火力があり火持ちのする燃料としてのマツやクヌギの割り木は，どれだけ家計が苦しくても仕入れて，3月に皆軒に積んだ。柴も，岩倉や八瀬などの山のものを買ったりもした。炭は，鞍馬から女の人が背中に2～3俵負って年に

一度売りにきた。戦時中から戦後にかけては，炭1俵と麦2升を交換していた。また，野菜と交換することもあった。炭を焼いていたのは，花背や百井で，鞍馬や静原では焼いていなかった。」

・柴以外の山の産物について

「付近の山から得られた柴以外の産物としては，マツ葉を中心とした落ち葉があった。それはコナハと呼ばれ，燃料にされた。それを熊手で集めるコナハ掻きも冬場の仕事で，昭和30年頃まで行われていた。

マツタケはかつて多く採れたが，山で採ったマツタケを売ることはなかった。他にシメジなどのキノコも採れた。また，量的には少ないが，サカキやウラジロやマツなど，正月に自家用に使う植物の採取も行われた。そのために，朝から午後2時，3時ごろまで山を歩き，サカキ，ウラジロ，ササやマツなどを採って正月の準備をした。サカキは，8組，16束を採った。静原（しずはら）からは，春と秋の彼岸とお盆の3回，仏様に供えるシキミを売りにきた。シキミは近くの山にはなかった。」

・林の様子について

「山にはマツが多かった。マツの木は，中にはやや大きなのもあったが小さなものが多かった。クヌギもあったが，マツが三本あればクヌギが一本あるかないかといったところだった。マツは自生のもので，とくに大事に育てられたというものではなかった。山では人がよく柴を刈ったり，コナハを集めたりしたために，人が入りやすかった。ツツジが咲く頃には，花を切りに行く人もいた。」

・池の近辺などの野草の利用について

「マコモは道路の際にあり，それを刈って草履にした。その頃は，学校行くのに，皆草履を履いていた。池の周辺の草で利用したのはマコモだけで，ほかには全くなかった。屋根の材料となるヨシ，その他肥料などにできるような草は池にはなかった。茅はなく，家の屋根葺きには，ムギ藁を使った。」

〈iii〉まとめと補足

以上，岩倉とそこから近いところに居住し，かつての植生やそれと人々との関わりを見てきたお二人の古老の方のお話の要点を紹介した。今井さんが知っていた岩倉付近の状況は，深泥池付近とは柴採取の許可の得方などに違いはあるが，共通点は多く，付近のそのほかの古老の方々のお話も総合すると，以上のお二人のお話に，高度経済成長期の前やその初期の頃までの岩倉周辺の山の植生やそれと人とのかかわりの状況がかなりまとめられていると考えられる。

今井さんのお話にもあるように，かつて岩倉周辺の山では，さかんに燃料としての薪の採取が行われ，とくに戦後間もない頃の燃料不足の時代には用材用のスギやヒノキまでも燃料とされていた。松尾さんのお話に出てきたマツの落ち葉を燃料として集めるコナハ掻きが行われたのは，岩倉でも同様であった。

山の柴や落ち葉や下草は，田畑の肥料にもなるが，上記のお二人への聞き取りなどから，昭和30年代まで，京都の町からはやや離れた岩倉付近でも，肥料は町からの下肥（人糞尿）が主体で，

山の落ち葉や草などはほとんど利用されていなかったようである。

なお，深泥池の村では，安土桃山時代の終わり頃，村から6km前後も離れた貴船山の柴草を採取していたことが古文書からわかるが[42]，古くから燃料としての柴や屋根葺きや肥料などとして使える草の確保には苦労していたものと考えられる。

❸……伊勢湾口の離島（神島）の場合

神島は，伊勢湾口に浮かぶ小さな離島である。行政上は三重県鳥羽市に属するが，鳥羽佐田浜港からは14Kmほど離れているのに対し，愛知県の渥美半島の伊良湖岬からは3.5Kmほどの近いところに位置する。島の面積は約0.8Km^2，人口は500人ほどの小さな島であるが，三島由紀夫の小説『潮騒』の舞台となったことでよく知られている。

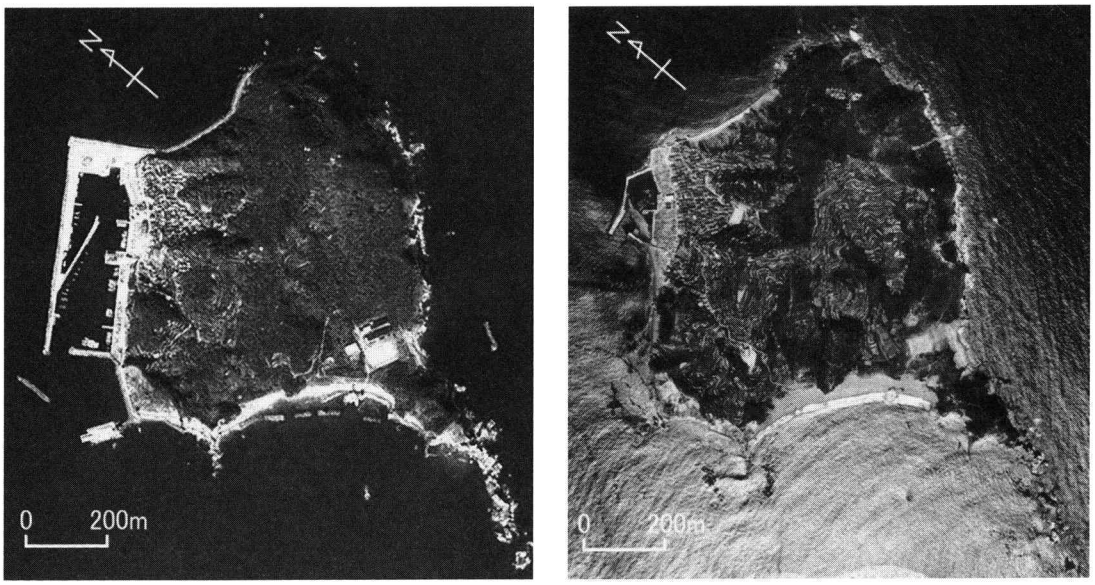
筆者は，国立歴史民俗博物館の展示プロジェクトに関わった関係で2006年5月に2度その島に行く機会があり，島の植生などの現況を見るとともに，地元の方から，かつての島の植生やそれと人々のくらしとの関係などについての話を聞くことができた。

その島は，上記の岡山県北部の中国山地や京都市北部とは全く異なった地理的環境にありながら，高度成長期の頃を契機として，植生景観はやはり大きく変化してきている。ここでは，神島におけるそうした植生景観の変化やその背景についてまとめておきたい。

（1）写真に見る高度経済成長期とその後の植生景観

a）空中写真

まず，高度経済成長期の最中とその後の空中写真を見てみたい。写真-16の右側の写真は，昭和39（1964）年5月9日に国土地理院が高度3800 mから撮影したもので，左側の写真は，平成18（2008）



写真－16　神島の空中写真（国土地理院撮影：2008年〈左〉，1969年〈右〉）

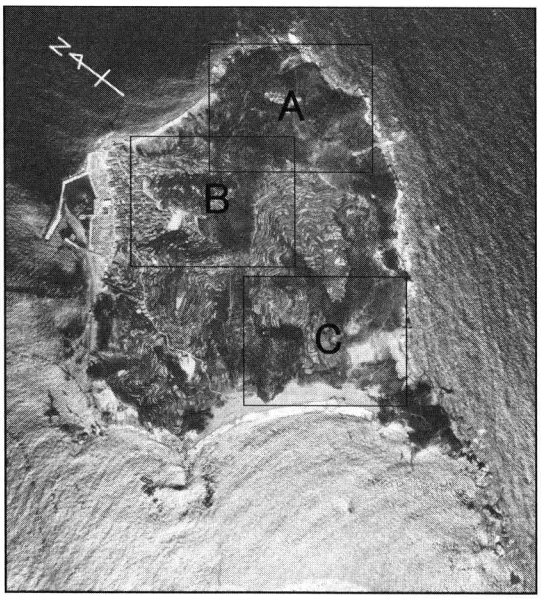
年9月12日に同じく国土地理院が高度約3100 mから撮影したものである。

その2枚の写真を比べると，森林の樹冠の大きさなどからよくわかるように，近年は島の大部分が高木の森林で覆われているのに対し，高度経済成長期の頃は，島の北西にある集落の部分を除くと，その約半分が段々畑などの農地であった。とくに南向きの斜面では，段々畑になっているところの割合が大きかった。近年でも，まだわずかに段々畑の見られるところもあるが，集落から比較的近いところを中心に，ごくわずかしか残っていない。

森林の主要な樹種は，後述のように高度経済成長期の頃はマツが中心であったが，近年マツはマツ枯れで減少し，代わってヤブニッケイ，モチノキ，カクレミノ，ヤブツバキなどの常緑広葉樹の割合が大きくなってきているところが多い。

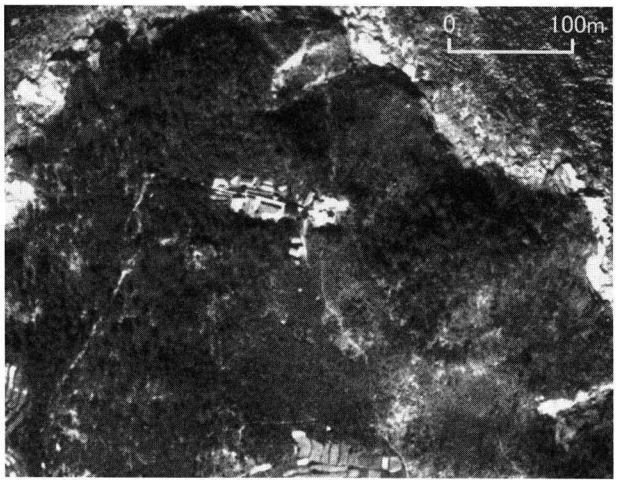
写真-16の高度経済成長期の頃の空中写真をもう少し拡大して詳しく見てみたい。写真-17は，島の北東端部分（図-3のA）で，写真中央よりも少し上のあたりに，灯台とその関係の建物などがやや斜め横方向に長く広がっている。その灯台の北（左上）側には，とくに密生した高木の林がまとまって見られる。また，灯台の南東（右手）にも，その北側のものに比べると面積は小さいが，高木の樹木が密生しているところがある。また，灯台の西（左下）側には，密度は高くないところが多いが，やはり高木の樹木がだいぶ存在していることがわかる。

一方，灯台の南西（下方）や東（右上）などには，樹冠の大きさや道の見え方などから，植生高がせいぜい2～3 m程度までのかなり低い植生の部分が広く存在していたことがわかる。

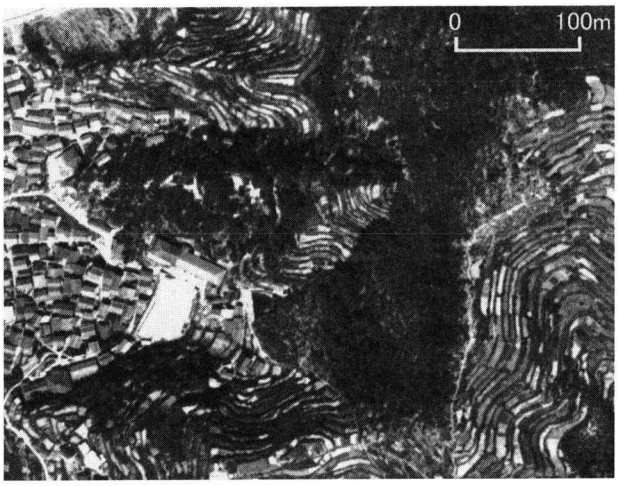


図－3　神島の拡大部分位置
（ベースの写真は写真－16の右）

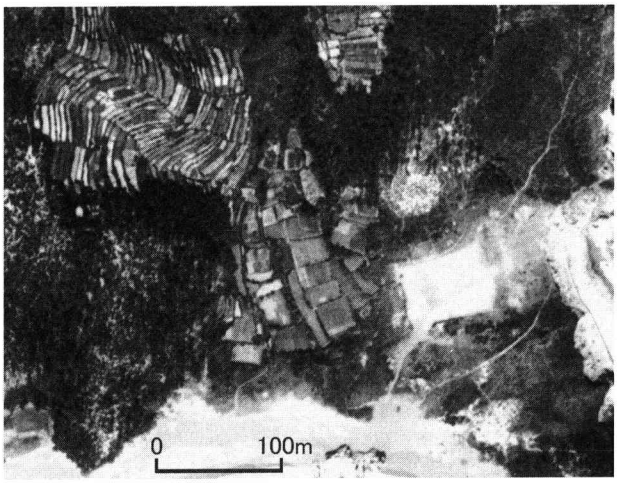
次に，写真-18は，一部写真-17と重なるところがあるが，主に写真-17の西方部分で，集落の南東部から南東方向，島の中央部付近も含んだ区域である（図-3のB）。この区域の過半は，山の斜面を利用した段々畑と密集した集落であり，森林などの植生が見られるところはさほど多くはない。しかし，写真の中央部より少し上に八代神社があり，そのあたりから横方向に，幅はさほど広くないが，帯状に高木の密生した樹林が見えるところがある。また，写



写真－17　1969年の空中写真の一部（図－3のA）



写真－18　1969年の空中写真の一部（図－3のB）



写真－19　1969年の空中写真の一部（図－3のC）

真右上の写真-17と重なる部分には，まばらではあるが，高木の樹木が見えるところが少なくない。また，写真中央付近から下方にも，高木のややまとまった林がある。その左下方，段々畑を挟んだところにも，一部密集したところもある高木の林が見られる。ただ，そうした高木の樹木の見られるところの割合はさほど大きくはなく，樹冠が確認しにくいような植生の部分が少なくない。その中間的なところもあるが，この写真の山地の農地以外のところでは，高木の樹林地とともに，比較的低い植生が見られるところが少なくなかったことがわかる。

写真-19は，写真-18の南側の地域で，写真の下方や右手には海岸が見える（図-3のC）。写真中央付近には，この島では珍しく，比較的広い区画の農地が連なって見える。その左上方とやや右手上方には，山の斜面を利用した段々畑が広がっている。山地部分には，高木もある程度見られるところもあるが，密集して生えているところは少ない。写真の左下方や写真中央よりも少し右上方には，山地の地肌が白く見えているようなところが少なくない。そのうち写真の左下方部分の山地は，今も痩せ地のところが多く，クロマツの低木やハイネズやシャシャンボなど，乾燥した痩せ地に生える樹木が多く見られるが，この写真の状況などから，それらはだいぶ前からそのあたりの植生の主要構成樹種であったものと思われる。なお，写真中央よりも少し右上方の同様な部分は，今は学校の敷地に変わっている。

写真の右方には，狭い道がはっきりと見えるところが多く，そのあたりは低木や草が多いところと考えられる。また，写真右下端のあたりは，弁天山の登り口付近であり，黒っぽく見えているのは，後述の写真などから，さほど高くないクロマツの林と思われる。

b）地上からの写真

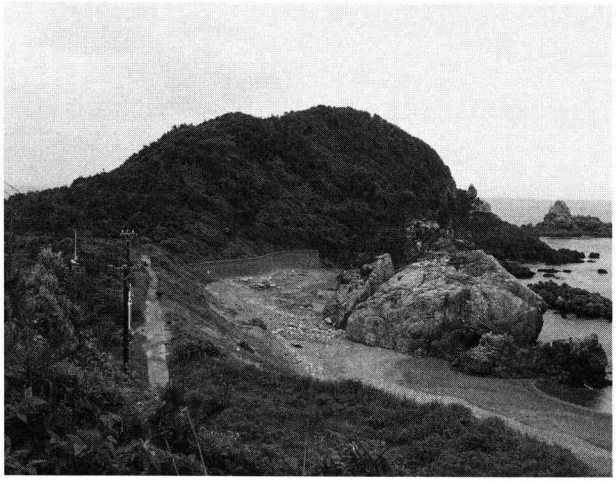
写真-20は，昭和39（1964）年にまとめられた冊子[43]の表紙の写真で，島の南端の弁天山を写したものである。写真には高木のマツもある程度見られるが，まとまって生えているところは少なく，

まばらに生えているところが多い。また，森林の下層の植生は乏しく，山のかなり上まで岩が露出しているように見えるところも多い。写真に見える高木の大部分は樹形などからマツと思われる。

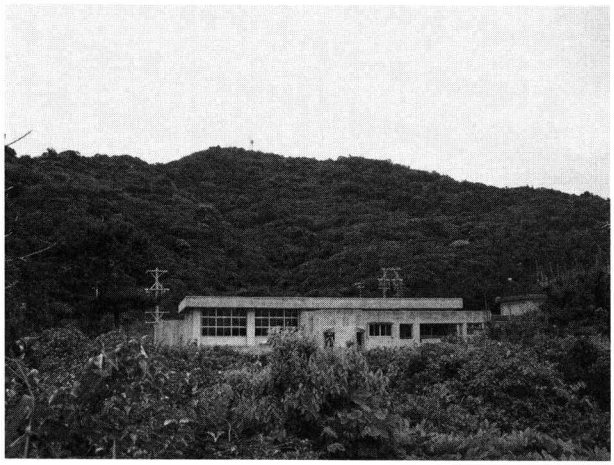
一方，写真-21は近年の弁天山である。今では，マツは少なくなり，モチノキ，カクレミノ，ヤブツバキなどの常緑広葉樹中心の森林が地上部を広く覆っている。樹木は密集し，海岸のすぐ近くを除けば，岩が露出して見えるようなところはほとんどない。

写真-22は，神島小中学校の建物の一部とその裏山のあたりを写した近年の写真であるが，その裏山にかつてかなり広く見られた段々畑は見られず，全般的に森林化してきている。また，写真-23は，写真-19の左下方部分のあたりを北西側から撮ったもので，左上方には弁天山も少しのぞいている。上述のように，そのあたりはだいぶ前から痩せ地であったと思われるところが多く，今も一部にクロマツやハイネズなどの樹木も見られるが，常緑や落葉の広葉樹林の森林となってきているところが多い。

写真―20　弁天山（神島青年団『神島』1964の表紙より）



写真―21　弁天山（2006年5月26日撮影）



写真―22　元中学校の建物とその裏山付近（2006年5月26日撮影）

写真―23　神島南東部（2006年5月26日撮影）

(2) かつての神島の植生とその背景について

a) 文献類から

空中写真からは，樹種の特定は難しいが，神島のかつての植生については，高度経済成長が始まる前の昭和20年代中後期の調査結果がある[44]。それによると，島の大部分の植生は山地林で，クロマツが主要木であった。また，その山地林を構成するその他の樹種としては，ウバメガシ，スダシイ，シロダモ，ヒメユズリハ，モチノキ，サカキ，トベラ，カクレミノ，シャシャンボなど常緑広葉樹の割合が大きく，一部ネムノキやイヌザンショウなどの落葉広葉樹もあった。また，森林の下層の灌木としては，ヒサカキ，ハマヒサカキ，センリョウ，テリハノイバラ，カマツカ，アキグミ，モチツツジ，アリドウシ，ハイネズ等があった。また，草本・シダ類としては，ヒトツバ，フモトシダ，コシダ，ウラジロ，ゼンマイなどのシダ類が多く，またツワブキ，ススキ，ツボクサ，ノカンゾウ，ヤブラン等があった。一方，島の西南部の海浜には，ハマゴウを優占種とする草原があった。

かつてマツが主な樹木であったことは，神島を舞台とし，昭和29（1954）年に発表された三島由紀夫の小説『潮騒』にも反映されている。それには，たとえば次のような記述がある。

「若者は松並木のあひだから，潮（うしほ）のとどろきの昇ってくる眼下の海をながめた。」（第1章）

「灯台のちかくへいつも焚付（たきつ）けの松葉をひろひに行くので，灯台長の奥さんと近づきになってゐた母親は，息子の卒業を引き延ばされては，生計が立ちゆかないと奥さんに愬（うった）へた。」（第1章）

「風がわたつて来て，松の梢々（こずゑ）はさわいだ。」（第3章）

「灯台の裏手の松林の急斜面をのぼるうちに，新治は汗をかいた。」（第4章）

「やがて松林の砂地のかなたに，三階建の鉄筋コンクリートの観的哨が見えだした。」（第4章）

「若者は観的哨の一階をさしのぞいた。束ねられた枯松葉が山と積んである。」（第4章）

なお，三島由紀夫は，『潮騒』執筆のために神島の取材を昭和28（1953）年3月と8月の終わりから9月のはじめにかけて二度行い，その取材内容を二冊の手帳に日記のかたちで日付順に記して残している[45]。それには，次のような記載がある。

「松のいたゞきで，鶫（つぐみ）あらうか，小鳥がコチョコチョリール，コチョコチョヒイヨヒイヨヒイヨと歌ってゐた。」（灯台付近）

「アイガミ山や東山（灯台のある山）の老松も，村内の電線も風でうなり出す。」（青年団機関誌「孤島の光」抜粋）

「灯台に泊る。松葉を束ね，途中の道につみかさねあり。下の港にも松葉あり。炊料也。これから秋にかけて集める。荒れた日の朝は，村中一ヶ所に集まり行く。」

「秋—紅葉少し。松茸狩り，4，5，ヶ所。しめぢ。炊き物に不自由故，女は「ゴ（落松葉）掻き」に，嵐のあとなど，けんめい也。」

三島の取材記録には，直接見聞したものだけではなく，神島に関する冊子の内容や地元の人々からの聞き取りも含まれ，神島の自然や文化，民俗などを幅広く捉えようとしていることがわかる。小説『潮騒』は，そうした取材をもとにしたもので，植生の描写については，基本的に神島の昭和20年代末期の状況をもとに記されているものと考えられる。それは，上記のようにマツに関する描写にもよく表れている。

一方，神島には，かつて低木や草が多い場所も少なくなかったことは空中写真からも確認できるところであるが，『潮騒』の次の記述は，灌木や草が多いそうした場所のことを記したものである。

「若者は山に登った。ここは歌島[46]の最も高いところである。しかし榊，茱萸（ぐみ）などの灌木や高草に囲まれて，視野は利かない。草木のあひだから潮騒がひびいてくるだけである。ここあたりから，南へ下りる道はほとんど灌木や草に侵され，観的哨跡へゆくまでは，可成な迂路を辿らなければならなかつた。」（第4章）

なお，昭和34（1959）年には，伊勢湾台風で多くの樹木が倒されたため[47]，上記の昭和39（1964）年空中写真では，その前よりもいっそう草地的な植生部分が多くなっているものと思われる。

ところで，三島由紀夫の小説やその取材ノートから，松葉が燃料として集められ，観的哨や道添いなどにその束が積み重ねられていたことがわかる。それは女性の仕事として夏の終わり頃から秋にかけて集められたようであるが，取材ノートの「炊き物に不自由故・・・嵐のあとなど，けんめい也。」の記述から，マツの落ち葉までも貴重な燃料として熱心に集められていた状況がよくわかる。それに関しては，『鳥羽市史 下巻』[48]に興味深い記述がある（下記）。

「昭和30年ごろまではすべて一般家庭の燃料は柴，薪の天然材だった。堅神，加茂地区，鏡浦地区のように山を多く占める地域や，離島でも答志や菅島のように面積の広い島は生活用燃料を自給できたが，島の小さい坂手，神島や鳥羽町は確保に苦労した。

〈神島〉神島の生活用燃料は裏山の松葉や浜の流木，山の下草や根であった。明治十六年の地誌取調書写（明治三十六年）の民業の項に「女　四月ヨリ十月マデ蜑（あま）ヲ業トシ，十一月ヨリ三月迄ハ薪材ニ代用スヘキ草ヲ刈り，或ハ草ノ根ヲ取ルヲ業トス」とあり，波風の強い冬場の女の仕事はもっぱら薪取りであった。そして山の松から落ちる枯枝や松葉だけでは足りない燃料は，草やその根までも使っていたことがわかり，鳥羽の村々の中では坂手以上に，最も厳しい情況にあり，不足の場合は坂手と同様，浦村より購入することが多かった。」

生活用燃料として流木や草も利用されていたことは，後述の聞き取りからも確認できるが，この記述から，より古い時代には山の草の根までも利用されていたことがわかる。なお，明治16（1883）年の地誌取調書写については，その直接確認を試みたが，その所在がわからず，確認ができなかった。

山の草木や落ち葉などを燃料とする島の生活が大きく変わる契機となったのは，プロパンガスの導入である。そのプロパンガスが島に導入されたのは，高度経済成長期の最中の昭和38（1963）年であった[49]。それにより，島の植生景観はやがて大きく変わることになった。

なお，近年では森林的植生に変わってきているところが多いかつての農地で，かつて作られていた作物については，高度経済成長期の頃と，その頃から長年かけた調査のまとめから知ることができる。[50][51] それらによると，かつて島の段々畑を中心とした農地の主要な作物はムギとサツマイモであった。ムギはコムギよりもオオムギの割合が大きかった。また，アズキやダイズ，ダイコン，サトイモ，ジャガイモ，ハクサイ，ホウレンソウなど，さまざまな野菜が作られていた。ただ，昭和42～43（1967～1968）年頃になると，ムギを作る家もなくなってしまったという。オオムギは5月末頃までに収穫されたようで，昭和39（1964）年に撮影された空中写真（写真-19や写真-20など）には，ムギ畑が少なからず写っているのではないかと思われる。

b）古老への聞き取りから

〈i〉4名の古老への聞き取り

ここでは，神島で長くくらしてきた池田利正さん（昭和3〈1928〉年生まれ）かよ子さん（昭和5〈1930〉年生まれ）夫妻，藤原喜代造さん（昭和11〈1936〉年生まれ），藤原コウさん（大正14〈1925〉年生まれ）より，平成18（2006）年5月にうかがった話の要点を紹介したい。なお，以下の各記述は，複数の方の聞き取り内容を互いに確認しながらまとめた部分が多いため，個人別の話の形にしていない。

・山の植生について

「共有財産であったかつての山の主な樹木はマツであった。マツは主にクロマツだったが，アカマツもあった。マツタケ，ハツタケ，シメジなどたくさん採れた。弁天山など，伊勢湾台風前まで大きなマツがたくさんあったところがあるが，伊勢湾台風で被害を受け，またその後のマツ枯れでかなり少なくなった。」

「神山（祠のある山）にはモチノキもあり，風の宮など太いものがたくさん生えているところもあった。弁天山には祠があった関係でモチノキもたくさんあった。通常は伐ることができなかったが，正月に祭りに使うために，毎年一本ずつ切った。また，灯台の少し上には富士の宮という祠があり，そこには大きなモチノキが残っている。子供のころ，モチノキの皮をむいて，トリモチをつくった。」

「山の下草は刈って薪にしたので，山には下草があまりなかった。ミソバ（カクレミノ？）は燃やさないので残っていた。ツツジやツバキなども少しあった。最近は，ミソバとヤシャブシが大きく成長して繁茂しているところが多い。」

「生で食べられる木の実のなる木としてはグミやアケビなどがあった（アケビは少なかった）。現在，植えたヤマモモがあり少し前から実がなるようになってきているが，かつてはなかった。島には現在ゼンマイがたくさんある所もあるが，かつてはゼンマイを食べなかった。（よその土地からきた人の中には，採って食べる人がいた。）」

「土地がやせていて樹木の育ちが悪いところがあった。そういう所には，マツを植林した。しかし，植林してもなかなか根付かなかった。」

・植生にかかわる人々のくらし

「クロマツなどの樹木は，伐採はもちろん，枝を伐ることさえも通常は禁じられていた。ただし，正月に行われる祭りの松明を作るために，マツが年に2本ほど伐られた。また，正月に各戸に配給される薪としてマツが伐られた時期があった。」

「山の落ち葉を集める仕事は，村の女性の仕事だった。それは燃料のための松葉で，ゴクモと呼ばれた。10月頃，松葉がたくさん落ちた。松葉採取は自由にはできず，山の口開けによって，一斉に行われた。その口開けは，しけの後，まだ暗い朝の3時頃に鳴る鐘が合図だった。山には入りやすい場所もあったが，一方で岩場など危険な場所で作業をする人もいた。それぞれがいつも行く場所（得手（えて））に行き，まず自分が掻こうと思うところを所々熊手で少し掻いて“バンドリ”をした。口開けの際には，枯れ枝や下草の採取も許されていたが，下草は少なかった。台風の時期など，当時はカッパがなかったが，雨に濡れてでも山に行った。蓑もなかった。また，倒木を切り，それを隣組でみんなで運び，それを分けてくじ引きで使ったこともあった。畑のそばの茅も苅って燃料にした。」

「流木も薪として重要だった。流木は強い東風の時に多く漂着し，人々は競ってそれを取りに行った。また，泳いでも取りにいったし，船でも取りいった。流木があれば，漁はそっちのけであった。薪を売りに来る船もあったが，それを買うことはほとんどなかった。なお，ヤナギ　だけは“オリュウ”といって言い伝えにより燃料とはしなかった。」

「神島において，燃料以外に利用された植物としては，祭りためのグミ（マルバグミ）やモチノキなどがある。グミの実は初夏の頃熟し，主に子どもたちが食用にした。食用にされた植物としては，ほかにもツワブキ，ミツバ，ヨメナ，ヨモギ，クワの実などがあった。」

「神島には，島の南側および西側の低地に昭和初期まで水田があったが，昭和30年代にはそれは全くなく，農地は畑だけであった。農家1戸当りの耕地面積は，ほとんどの家が1反に満たない小さなものであったが，そこでは重要な食糧となるムギやサツマイモなどが作られていた。畑作のための肥料として，各家々から出る人糞尿や魚類滓を野壺に貯めて利用した。標高差の大きい島で，それらを専ら人力で運ぶのはたいへんな作業であった。ムギ藁などの作物の残渣も肥料として利用したが，山には肥料にするほどの草や落ち葉はなかった。干した魚をそのまま土の中に入れて使うこともあった。12月から3月ごろまで，たくさん網にひっかかる鵜も使った。また，島の東側にある険しい岩場の断崖にはウミウの糞の採れるところがあり，それが良い肥料となった。それは，みんなが採ったのではなく，専門で採る60歳前後くらいのおばあさんたちが数人いて，その人たちから毎年買った。」

〈ii〉まとめと補足

以上の聞き取りからも，かつての神島の山の植生はマツが主体であり，それは主にクロマツであったことがわかる。一方，アカマツもある程度あったが多くはなかったようである。前記の三島由紀夫の『潮騒』創作ノートに，「秋―紅葉少なし。松茸狩り，4，5ヶ所。」と記されたところがあるが，マツタケはクロマツ林に出ることは希であるため，それもアカマツの林が所々にあったことを示唆している。また，聞き取りからは，山の落ち葉や下草までも燃料として利用され，山には落ち葉や

下草が少なかったことがわかるが，それはアカマツのある林でマツタケが出る好条件であったと考えられる。

一方，人口に対して燃料供給地である山林の面積が小さかった神島では，燃料の確保が非常に重要であったことが，この聞き取りからも確認できる。文献類からもわかるが，高度経済成長期のはじめの頃でも，木の枝の採取さえも自由にはできず，マツの落葉のほかに草も燃料として利用されていた。また，浜などの流木は島の人々にとってかなり貴重なものであった。

野山の草は肥料として使われることもあったが，神島の場合は，燃料としての利用が優先され，肥料としてはほとんど使われなかったようである。肥料は下肥のほかに魚類や鵜の糞などが使われた。

神島の人々は漁業や海運など，海との深い関わりでくらしてきたが，その一方で，かつて神島の人々は山から日々の生活のための燃料を得，また山の南斜面を中心に，その山頂近くまで耕されていた段々畑で穀物や野菜を育てながらくらしていた。面積が1Km^{2}もない小さな島に，昭和30年代には1300人前後の人々が住んでいたため，燃料の確保や畑での作物生産はたいへんであったが，そこには島の人々の長年の知恵が生かされていた。

なお，弁天山など祠のあるところ，あるいはかつてあったところには，モチノキがたくさんあるところがあった。モチノキは，トリモチ作りにも利用されたようであるが，正月の祭りには欠かせない木でもあった。

❹……総括

高度経済成長期を契機とする植生景観変化とその背景について，岡山県北部の中国山地（旧阿波村付近），京都市北部郊外（左京区岩倉付近），伊勢湾口の離島（神島）の3つの地域を例に，写真や文献類，また古老への聞き取りなどをもとに見てきた。

その結果，地域により植生景観の変化のパターンはさまざまであるが，いずれの地域でも高度経済成長期の頃を境に，植生景観の大きな変化が起こったことが確認できる。すなわち，岡山県北部の中国山地の旧阿波村付近では，高度経済成長期の頃までは，広い草山が見られるところが何箇所もあったが，高度経済成長期を契機にして，牛の飼育がなくなることなどにより草原の必要性がなくなり，草山は急速に消滅していった。一方，スギやヒノキを中心とした人工林は，第二次世界大戦後から高度経済成長期の初期にかけて木材価格が高騰していたことに加え，草原の必要性がなくなったことや国の政策などもあり，高度経済成長期の頃を中心に急増し今日に至っている。また，かつて薪炭林として利用されていた雑木林は，スギやヒノキの人工林に変わったところも少なくないが，一方でそのまま残ったところでは，昭和30年代の半ば頃まではさかんに利用され比較的小さい樹木が多かったものがその後利用されることがなくなり，近年では樹木の高木化が進んでいるところが多い。

また，京都市北部郊外，左京区岩倉付近の里山は，かつてはマツタケの産地でもあり，アカマツ林が広く見られたところであるが，高度経済成長期の頃を境に，燃料や生活の変化により，森林の利用がなくなっていった。それにより，林の変質化が始まり，近年ではアカマツ林はマツ枯れによ

り大幅に減少してきている。一方，森林が放置されることにより植生の遷移が進み，シイやカシなどの常緑広葉樹林の割合が増えてきている。また，岡山県北部の旧阿波村付近に比べるとささやかではあるが，高度経済成長期の頃にスギやヒノキなどの人工樹林化が進んだところも見られる。また，高度経済成長期の頃までは，森林がさかんに利用されていたために，さまざまな林齢や樹高の森林がパッチ状に見られるところが多かったが，近年はほとんどのところが高木の森林となり，森林樹高の変化が全般に小さくなってきている。

また，伊勢湾口の離島，神島の場合は，かつてはその山の植生はマツが主体であったが，高度経済成長期の途中からプロパンガスが各家庭に入るようになり，燃料としてさかんに利用されていた落ち葉や下草の利用もなくなり，ここでも森林の放置化によって植生の遷移が進み[52]，マツ林は大幅に減少してきている。そして，近年ではヤブニッケイやタブノキやカクレミノなどの常緑広葉樹主体の森林が増えてきている。一方，かつては山の南向きの斜面を中心に，段々畑が見られるところがかなりあったが，昭和40年代の初期には，そこでの主要作物であったムギも作られなくなるなど，やがて段々畑の放置化が進むところが多くなり，近年ではそのかなりの部分が自然に森林化しつつある。

このように，ここで取り上げた3つの地域では，高度経済成長期以降の植生景観変化のパターンはそれぞれ大きく異なるが，いずれの地域でも高度経済成長期の頃のくらしの変化や国の政策などが大きな原因となり，人々の植生への関わり方が激変し，それによって大きな植生景観の変化が起きてきたという点は，どこも同じである。

なお，その変化には，植生の人工樹林化など，高度経済成長期の間に明確に見られた部分もあるが，人間の植生への関わりがなくなり，樹木が年々成長したり，あるいは植生の遷移が進んだりする変化は，ふつう短期間では顕著ではない。しかし，高度経済成長期の終焉から40年近くを経た今，それはたいへん大きな変化となって顕在化してきているところが多い。そして，植生遷移の変化については，概してまだその過程にあるため，それは今後もまだ長く続くことになるであろう。

おわりに

本稿で取り上げた3つの地域は，地理的環境がそれぞれ大きく異なるところで，上記のように高度経済成長期以降の植生景観変化のパターンはそれぞれかなり違ったものであった。しかし，それらの地域ではどこも，高度経済成長期に急激に変化した人々のくらしなどによって，植生景観も急速に，あるいはその後数十年の年月を経て大きく変化することになった。

ここで取りあげた例はわずか3例ではあるが，他の日本の地域でも，かつて人々の影響が植生にも大きく及んでいた地域では，植生景観の変化のパターンはそれぞれでも，やはり同様に高度経済成長期を契機として，大きな植生景観の変化が見られるところが多いものと思われる。日本の山地部などの植生は，ほとんどの地域で，かつては燃料確保や家畜飼育などのために非常に重要であったが，高度経済成長期の社会経済の大きな変化に伴い，植生に対する人々の関わり方も急速に変わり，植生景観の大きな変化につながってきている。

一方，高度経済成長期の頃まで見られた植生景観もそれぞれ歴史があり，その前の数十年間ほど

の間にも，かなり変化していたところも少なくない。たとえば，明治期の国の政策により，全国的に草原の面積はしだいに減少していっていたし[53]，京都周辺などでは，草木のないハゲ山が減少する一方，森林の樹木の高木化が進んだりもした[54]。このように，それぞれの時代の社会や文化などを反映し，植生景観も変化してきた。

とはいえ，高度経済成長期を契機とする植生景観の変化は，きわめて急激で特別なものである。高度経済成長期までの植生景観の変化は，ふつう何らかの人の植生利用の中で起きたものであったのに対し，高度経済成長期を契機とする植生景観の変化には，人が植生に関わることがなくなることによって起きた変化が少なくない。また，ここで取り上げた岡山県北部の旧阿波村付近の草原の例のように，縄文時代以降，過去数千年，あるいは1万年前後にわたり類似の植生景観が維持されていた可能性が高いところでも，高度経済成長期を契機に，短期間のうちにそうした植生景観が消滅していくことになった。

こうして，長く続いた人々のくらし方などを劇的に変えた高度経済成長期は，植生景観のかつてない大きな変化を生む契機となった時代でもあると言うことができるであろう。

最後に，本研究では各地域の古老の方々にたいへんお世話になった。本稿でお名前を挙げることができなかった方も含め，そのご協力に深く謝意を表したい。一方，このような研究に関わる研究会にお誘いいただき，また多大なご支援をいただいてきた新谷尚紀先生（前国立歴史民俗博物館教授・現國學院大学教授），関沢まゆみ先生（国立歴史民俗博物館教授）に深くお礼申し上げたい。

註

(1)――岡山県教育委員会『阿波・梶並の民俗』岡山県教育委員会，1971
刊行は1971年であるが，1969年度の調査の成果がまとめられている。

(2)――村制施行百周年記念事業実行委員会村誌編纂部会編『阿波村史』阿波村，1993

(3)――小椋繁述氏は，阿波村の収入役と助役を計20年以上勤めるなど，村政に深く関わる一方，『阿波村史』の編集，出版でも中心的な役割を果たした。この回顧録は『阿波村史』刊行後の1994年から1998年頃にかけて記されたもので，幼少期以降の思い出や出来事，長年関わってきた村政や村誌刊行の裏話などがA4用紙110枚にワープロ打ちで綴られている。

(4)――茅（萱）は，屋根を葺くために用いる草の総称で，具体的な植物種としてはススキやヨシなどがあるが，山地では茅と言えばススキを指すことが多い。なお，本稿では萱の字を使わず，茅の字を用いる。

(5)――『阿波村史』p.30

(6)――『阿波村史』p.188

(7)――『阿波村史』p.14

(8)――たとえば，同時代の測量の教科書である『測図学教程』（教育総監部，1900）には，荒地は「荒蕪シタル土地ノ総称ニシテ雑草漫生シ往々榛莽繁茂スルコトアリ，荒地通過ノ難易ハ植物ノ種類及其疎密ニ関ス」とあり，雑草を中心とした草原的植生であることが確認できる。

(9)――『阿波村誌』には，この植生図についての詳しい作成年代等についての記載はない。

(10)――『阿波・梶並の民俗』p.43

(11)――『阿波・梶並の民俗』p.43

(12)――『阿波・梶並の民俗』p.43

(13)――『阿波村史』p.190

(14)――『阿波村史』p.189

(15)――『阿波村史』p.195

(16)――土壌等の試料から微粒炭を抽出し，顕微鏡観察などを行うことにより，土壌等の深度による微粒炭の量的変化や，微粒炭の起源となった植物や植生について考える研究手法。

(17)――小椋純一「岡山県北部中国山地における微粒炭分析（1）」『日本植生史学会第22回大会講演要旨集』P-11，2007

(18)――小椋純一「岡山県北部中国山地における微粒炭分析（2）」『日本第四紀学会講演要旨集』巻38，p.134-135，2008

(19)――『阿波村史』p.157
(20)――小椋繁述氏回顧録より。
(21)――『阿波村史』p.159
(22)――『阿波村史』p.438
(23)――『阿波村史』p.438
(24)――『阿波村史』p.443
(25)――『阿波村史』p.169
(26)――『阿波村史』p.439-440
(27)――『阿波村史』p.440
(28)――『阿波村史』p.160
(29)――京都市史編さん所『京都市域の町村合併』京都市史編さん所，1970年代
(30)――小椋純一「うつりかわる岩倉の植生」『洛北岩倉誌』岩倉北小学校創立20周年記念事業委員会，p.306-385，1995
(31)――京都市公害対策室『京都市植生図』京都市公害対策室，1979
(32)――深泥池七人会編集部会編著『深泥池の自然と暮らし』サンライズ出版，2008には，佐々木，高原両氏によるコラムと筆者記述部分に，岩倉に近い深泥池付近でマツが増始める年代について記されている。ともに炭素14の年代測定をもとにした記述であるが，両者の年代には少し相違がある。しかし，遅くとも平安時代には京都周辺でマツが目立つ存在になっていたことは確かと思われる。
(33)――マツは典型的な陽樹で，裸地があれば真っ先に侵入してくるような樹木であり，貧栄養の土壌を好む。そうしたマツが増える環境がつくられ，それが長期にわたり維持されるには，人為的な連続的かつ相当強度な植生の利用が必要と考えられる。
(34)――明治38（1905）年に作成された計画説明書で，近畿中国森林管理局に所蔵されている。
(35)――京都府立総合資料館蔵
(36)――中村治『京都洛北の原風景』世界思想社，2000などに収められた写真から，大正時代以降の岩倉の植生景観を垣間見ることができる。
(37)――中村治編『洛北岩倉誌』岩倉北小学校創立20周年記念事業委員会，1995など
(38)――小椋純一「岩倉周辺のシイ林の分布とその拡大について」『洛北岩倉研究』第4号，p.42-49，2000
(39)――黒田慶子「樹木講座8：ナラ枯れと樹木の健康管理」『樹木医学研究』14（2），p.60-66，2010など
(40)――浜田稔『マツタケ日記』浜田稔先生定年退官記念事業会，1974
(41)――「みぞろがいけ」ともいう。かつては美土呂池，御菩薩池などと記された。
(42)――上賀茂神社の古文書『賀茂別雷神社文書　第一』所収の「御泥池里百姓中請文」（慶長4〈1599〉年による）
(43)――小久保勝幸編『神島』神島青年団，1964
(44)――谷口森俊「神島の植物群落学的研究」『三重県立大学研究年報』Vol.2 No.1，p.51-69，1955
　本文から，本調査は1949年と1954年に行われた調査のまとめであることがわかる。
(45)――三島由紀夫の『潮騒』執筆のための取材内容は，“「潮騒」創作ノート”として，その一部が『決定版　三島由紀夫全集』（新潮社，2001）に収録されている。
(46)――神島は『潮騒』の中では歌島という島名になっている。
(47)――東京女子大学民俗調査団『神島の民俗誌』東京女子大学民俗調査団，2005
(48)――鳥羽市史編さん室『鳥羽市史　下巻』鳥羽市役所，1991
(49)――東京女子大学民俗調査団『神島の民俗誌』東京女子大学民俗調査団，2005
(50)――江沢寛，今福敬明「島の農業」『専修大学地理学研究会紀要』（5），p.23-29，1959
(51)――田辺悟，田辺弥栄子『潮騒の島　神島民俗誌』光書房，1980
(52)――古老への聞き取りの中では，マツ林減少の原因が酸性雨との話も聞かれた。しかし，マツは遷移の初期の樹木であるため，マツ林の利用がなくなれば，植生の遷移が進み，やがてマツは枯れてゆく運命にある。神島のマツ枯れの原因として酸性雨の影響があった可能性は否定できないが，神島に限らず高度経済成長期以降急増したマツ枯れの背景には，森林の放置化，またそれによる遷移の進行が根底にあると考えられる。
(53)――小椋純一「日本の草地面積の変遷」『京都精華大学紀要』第30号，p.159-172，2006
(54)――小椋純一『絵図から読み解く人と景観の歴史』雄山閣，1992など

（京都精華大学人文学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2010年11月29日受付，2011年5月20日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
Vol. 171 December 2011

A Study of the Vegetation Changes Triggered by the High Economic Growth Period

OGURA Jun'ichi

Vegetation changes with the high economic growth period as the turning point and their backgrounds in three regions in Japan were studied based mainly on photos, literatures and interviews of elders. Those three studied regions were mountainous village located in the north of Okayama Prefecture (Aba, Tsuyama City), northern suburb of Kyoto City (Iwakura, Sakyo-ku) and an island in the mouth of Ise bay (Kamishima). Results are as follows.

In the mountainous village in northern Okayama Prefecture, broad grassland areas for cattle grazing et cetera were commonly seen until the time of high economic growth. However they have disappeared rapidly since the high economic growth period. On the other hand, plantations of Japanese cedar and Japanese cypress increased rapidly especially in the time of high economic growth. Meanwhile woodland trees once used for firewood and charcoal have usually grown much bigger as they have not been used as fuel since that time.

In the hilly and mountainous areas in the northern suburb of Kyoto, Japanese red pine forests were once seen widely. However, they have decreased greatly by pine wilt after the high economic growth period, as the forests were left without use and the plant succession proceeded. On the other hand, evergreen broadleaved trees such as *Castanopsis* and *Quercus* have been increasing gradually. And until the time of high economic growth, the forests had a variety of stand age and tree height due to the intense use. However, the variety has been lost greatly in recent years.

In the Kamishima island in the mouth of Ise bay, *Pinus* was once dominant species in the vegetation of the mountain. However, pine trees have decreased greatly, while evergreen broad leaved trees such as *Cinnamomum* and *Dendropanax* have increased after the high economic growth period. It is similar to the case of the northern suburb of Kyoto. Meanwhile the terraced fields once widely seen especially on the south-facing slopes of the island have been gradually covered with bushes and trees as they have been abandoned.

Thus, although changes in vegetation since the period of high economic growth vary by region, great changes of vegetation have occurred in every region due to the big changes of relationship between man and vegetation which were caused by the rapid changes of people's lives and nation's policy in the time of high economic growth.

Key words: vegetation changes, high economic growth period, northern Okayama Prefecture, northern Kyoto City, Kamishima island